

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.238

2013年3月

濱口総長がノースカロライナ州立大学を訪問



## 目次

### ●ニュース

濱口総長がノースカロライナ州立大学を訪問	3
濱口総長がヤンゴン大学及びヤンゴン第一医科大学を訪問	4
「PhD プロフェッショナル登龍門」キックオフ・ミーティングを開催	5
全学同窓会関東支部設立10周年記念講演・交流会を開催	5
平成25年度名古屋大学入学試験を実施	6
第39回経営協議会を開催	6
第8回高等研究院レクチャーを開催	7
国際産学官連携セミナーを開催	7
シンポジウム「バイオインフォマティクスのパラダイムシフト」を開催	8

### ●知の未来へ

姉妹をつなぎ合わせる仕組み	9
---------------	---

西山 朋子（高等研究院特任講師）

### ●知の先端

西暦1千年紀の世界システム論	10
----------------	----

佐藤 彰一（高等研究院特任教授）

### ●部局ニュース

理学部創設70周年記念行事を開催	12
第16回名古屋ビジネスセミナーを開催	13
平成24年度医学部附属病院災害訓練を実施	13
ウィーン医科大学と合同シンポジウムを開催	14
複合材シンポジウム13を開催	14
第25回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催	15
第9回次世代自動車公開シンポジウムを開催	15
第86回防災アカデミーを開催	16
名古屋シンポジウムを開催	16
特別講演会「地球温暖化問題の今後を考える」を開催	17
大学文書資料室シンポジウムを開催	17
展示会「ノートの中の青春」を開催	18
博物館企画展「なんじゃ？もんじゃ？～高木典雄とコケの世界～」を開催	18

### ●定年退職される教授のことば

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成25年1月16日～2月15日	29
---------------------------------	----

### ●イベントカレンダー

●名大トピックスの表紙で綴る授業及び学習風景	34
------------------------	----

### ●ちょっと名大史

天王崎から鶴舞へ ― 鶴舞キャンパスの誕生 ―	36
-------------------------	----

# 濱口総長がノースカロライナ州立大学を訪問







濱口総長は、1月23日(水)から27日(日)までの間、米国のノースカロライナ州を訪れ、ノースカロライナ州立大学において意見交換等を行いました。今回の訪問には、渡辺理事、杉山 直理学研究科教授、藤巻 朗工学研究科教授、渡邊明彦産学官連携推進本部教授ら関係者が同行しました。

総長は25日(金)、ランディ・ウッドソン同大学長と懇談し、特に、俯瞰力と独創性を備え、広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーを養成する博士課程教育リーディングプログラムに対する連携・協力について意見交換を行い、「PhD プロフェッショナル登龍門」及び「グリーン自然科学国際教育研究プログラム」の学生に対する短期派遣研修プログラム(ショート・リーディング・プログラム)の実施にあたり、両大学の協力関係を確認しました。これは、新たな試みとして、本学の参加学生に対し、米国において大学研究室での研究インターンシップ、企業訪問、研究成果の発表などを行う

機会を与え、イノベーションや異分野の理解力、コミュニケーション能力、リーダーシップを養うもので、現地に設立した名古屋大学テクノロジー・パートナーシップ(NU Tech)の協力のもと行う予定です。

また、産学連携に関し、企業との良好な関係・共同研究の推進、知的財産の確保、大学発ベンチャーの活用等について意見交換を行うとともに、国際学術コンソーシアム(AC21)に関し、同大学が10年間にわたり中心的なメンバーとして協力関係にあることを歓迎し、今年タイで開催されるAC21国際スクーリングの成功に向けた話し合いを行いました。このほか、同大学のジャパン・センター等を訪問し、留学生交流の推進、附属学校生徒の交流等について話し合いました。

さらに同日、ノースカロライナ・バイオテクノロジー・センターを訪問し、バイオ分野の大学、研究所の研究成果による新産業の創出、産業活性化のあり方について話し合いました。

また、前日の24日(木)には、ノースカロライナ州商務省を訪問してジャン・デビス ノースカロライナ州商務省局長(国際貿易担当)と面談し、NU Techによる活動の成果を伝えるとともに、大学の研究成果の産業界への移転、両地域の産業界の情報共有など、産学連携の一層の推進について意見交換を行いました。

本学とノースカロライナ州立大学は活発な交流を行っており、1985年に大学間学術交流協定を締結しています。さらに、2007年には産学連携に関する協定を締結し、NU Techを活用した産学連携、技術移転を推進しています。今回の訪問は、両大学のトップ間で意見交換を行う非常に良い機会となりました。両大学は、研究面での協力関係をさらに強めることを目指しており、今後、より緊密な関係の構築を図ることとしています。

本学では、引き続き外国大学との交流を進め、国際化を一層戦略的に推進する予定です。

2 | 3

- 1 ウッドソン学長(左)と総長(右)
- 2 ジャパン・センターにおける集合写真
- 3 デイビス局長(左)と総長(右)

1 |

## 濱口総長がヤンゴン大学及びヤンゴン第一医科大学を訪問

濱口総長は、2月1日(金)、ミャンマー連邦共和国のヤンゴン大学及びヤンゴン第一医科大学を訪問し、今後の交流促進のための意見交換を行いました。

ミャンマーでは、国家体制の民政移管に伴い、欧米を中心とした国々による経済制裁が解除され、豊富な資源や労働力を背景に、日本との経済的な交流が急激に進展しています。その一方で、ミャンマーが経済・社会発展するための投資環境は整っておらず、とりわけ市場経済化の基礎となる法整備が喫緊の課題となっています。本学はこれまで、人材育成支援無償事業(JDS)による法整備支援や、アジア諸国の若手リーダーを育成するヤング・リーダーズ・プログラム(YLP)による医療行政人材育成などを中心に同国との交流を行ってきましたが、昨今の状況下、留学生や研究者個人の交流に加えて、組織間交流を含む新たな段階での交流が始まりつつあります。

総長は、まずヤンゴン大学を訪れ、ポー・カウン ヤンゴン大学副学長、アウン・チョー同副学長をはじめとした20名を超える教員と意見交換し、これまでの交流をより発展させるため、同大学と大学間学術交流協定を締結すると



ヤンゴン第一医科大学における記念撮影



ヤンゴン大学における記念撮影

ともに、ミャンマー・日本法研究センター(仮称)を設置し、研究を通じて同国の法整備に関わる人材の能力向上を組織的に行いたい旨話しました。意見交換に引き続き、総長は、「名古屋大学から Nagoya University へー困難な社会に対応するための学術・教育イニシアチブー」と題し、1時間にわたり講演を行いました。研究者、大学院生など計200名を超える聴衆が熱心に聴講し、特に産業界との連携について多くの質問が出されました。

続いて、ヤンゴン第一医科大学では、タン・チョー ヤンゴン第一医科大学長と意見交換しました。タン学長からは、ミャンマーは長らく先進国との学術・学生交流が制限されていたため、海外機関との交流強化が急務であること、中でも半年程度の短期留学の機会が必要であることが強調されました。

総長はこのほか、沼田幹夫駐ミャンマー日本大使や元駐日ミャンマー大使であるフラ・ミン ヤンゴン市長、さらに本学で学んだ元留学生らと交流し、今後の活動に対する協力を依頼しました。

ミャンマーは、今後、経済・社会の急激な発展が見込まれており、それを担う人材の育成が急務と言われていきます。本学が、これまで培った経験やネットワークを活用し、研究・学生交流の強化・拡大を通じて貢献することが期待されます。



## 「PhD プロフェッショナル登龍門」キックオフ・ミーティングを開催

博士課程教育リーディングプログラム「PhD プロフェッショナル登龍門」キックオフ・ミーティングが、2月14日（木）、名古屋市内のホテルにおいて開催されました。

これは、来年度からのプログラム実施に先がけて、博士号を持ちながら社会の各分野においてリーダーとして実践的に活躍する職業人である「PhD プロフェッショナル」



講演を聴くプログラム担当者

を養成するというプログラムの趣旨を確認し、内容をより充実したものとしていくことを目的として開催されたもので、プログラムの全体責任者である濱口総長をはじめ、山本理事、益川敏英本学特別教授ら学内のプログラム担当者、及び浅野碩也東海テレビ放送株式会社社長、松永和夫経済産業省顧問ら学外のプログラム担当者である各界のトップリーダーが出席しました。

同ミーティングでは、総長からのあいさつ、プログラム・コーディネータである杉山 直理学研究科教授による「PhD プロフェッショナル登龍門」の概要説明に続き、松坂浩史文部科学省高等教育局大学改革推進室長から「博士課程教育リーディングプログラムの目指すもの」と題し、橋本孝之日本アイ・ビー・エム株式会社取締役会長から「PhD プロフェッショナル登龍門への期待－グローバル企業のビジネス戦略と人財育成」と題して基調講演がありました。

さらに、大屋雄裕法学研究科准教授、東田和弘博物館准教授、山内農学国際教育協力研究センター長らにより、本学のフロンティア・アジア（今後の高い経済成長が期待される、近隣アジアを越えた領域に存在するアジア諸国）における活動紹介などが行われました。

## 全学同窓会関東支部設立10周年記念講演・交流会を開催

名古屋大学全学同窓会関東支部設立10周年記念講演・交流会が、2月12日（火）、東京都千代田区の学士会館において開催されました。

講演会では、昨年11月まで2年5カ月にわたって駐中国日本国大使を務めた丹羽宇一郎全学同窓会関東支部長が、大使として築いてきた人脈から集めた最新情報なども交え



講演する丹羽支部長

ながら「どうする日本、どうなる中国」をテーマに講演し、同窓生約200名が熱心に聞き入りました。丹羽支部長は、尖閣諸島をめぐる問題を解決するには「司法で争うか、売買するか、または戦争で決着をつけるしかない」と3つの解決手段を挙げた上で「第4の道は休むこと」と指摘し、まず、日中両国が冷静になる必要があると話しました。故周恩来首相の「和すれば益、争えば害」を引き合いに、日中間が争っても有益なことがないことを訴え、まずは日中の首脳が互いの本音を語り合う必要があると語りました。

交流会では、濱口総長から、「名古屋大学の国際化と世界で活躍できる人材の育成に力を入れている」とあいさつがありました。続いて、東レ株式会社会長で政府の産業競争力会議議員も務める榊原定征同会副会長が乾杯のあいさつを行い、「産業競争力会議で今日の講演の内容を紹介したい」と述べました。

昭和42年に理学部を卒業した小林 誠本学特別教授を含む、昭和17年から平成21年までのほぼ70年にわたる卒業生が出席し、在学時代の思い出や互いの近況を語り合いました。東京芸術大学の好意により、声楽家の佐藤寛子氏とピアノ奏者の前田拓郎氏の演奏を楽しんだ後、出席者全員で本学学生歌「若き我等」を歌い、会は終了しました。

## 平成25年度名古屋大学入学試験を実施

平成25年度名古屋大学入学試験（前期日程）が、2月25日（月）、26日（火）及び27日（水）の3日間、東山地区、大幸地区及び鶴舞地区の試験場で実施され、合計1,718名の募集人員に対し4,884名の出願がありました。

試験当日は厳しい冷えこみの中、朝早くから豊田講堂前庭や図書館前のグリーンベルト周辺に受験者が集まり、出



試験会場様子

身校の教師から注意事項や激励を受け、本番に備えていました。また、受験票を手で試験会場を確認している受験者に対し、試験会場への行き方を説明している職員の姿があちらこちらで見られました。

1日目は、午前10時から外国語の試験が全学部において一斉に始まり、4,572名の受験者が試験問題に取り組みました。外国語の時間には、濱口総長、竹下事務局長が各試験場を訪れ、試験場主任や試験場本部の教職員を激励しました。午後には理科、地理歴史、小論文の試験が行われ、1日目の試験が終了しました。

2日目には午前10時から数学の試験が、午後には国語の試験が行われ、午後3時55分に全ての試験が終了し、試験を終えた受験者はお互いに試験問題について話し合うなどして、家路につきました。3日目は、鶴舞地区で医学部医学科の面接試験が行われました。

後期日程試験は、3月12日（火）に鶴舞地区で医学部医学科の面接試験が行われました。

## 第39回経営協議会を開催

第39回経営協議会が、2月7日（木）、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からあいさつの後、中期目標・中期計画の変更について松下副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、平成23年度に係る業務の実績に関する評価結果、大学院医学系研究科の改組、人事関係諸制度の見直し、平成25年度予算等、教員に対するインセンティブ制度の制

定、平成23年度会計検査院決算検査報告、平成24年度就職内定状況、産学協同研究講座・産学協同研究部門の設置、各種プログラム等の採択状況、名古屋大学基金の状況についてについて報告が行われました。

外部委員の方々からは、教員に対するインセンティブ制度及び名古屋大学基金の今後の方針等に関して貴重な意見が寄せられました。



会議冒頭であいさつをする濱口総長



意見交換の様子



## 第8回高等研究院レクチャーを開催

第8回高等研究院レクチャーが、1月28日(月)、理学南館大講堂において開催されました。「近代を問う東アジア」をテーマに行われた今回は、本学教職員や学生、一般の方々など、約180名の参加がありました。

レクチャーは安藤高等研究院副院長の司会により進められ、まず、安藤副院長が、同院が進めている、思想史を中



講演する水田名誉教授

心とした東アジアとの研究交流を紹介しながら、研究の現場から、東アジアにおける「近代を問う」意義を紹介しました。続いて、ヒューム研究の国際的重鎮である、坂本達哉慶應義塾大学教授が、「私のヒューム研究と日本の社会思想史研究」と題して、ヒューム研究の問題意識を取り上げながら、日本を含む東アジアにおける西欧思想受容の諸側面を明らかにし、東アジアにとっての西欧近代の意味を分かりやすく解説しました。次に、ハックスリーの「進化と倫理」やスミスの「国富論」等をいち早く翻訳し、中国の福澤諭吉と言われる厳復の研究で知られるキリル・トンプソン国立台湾大学高等研究院副院長が、「厳復：伝統と近代の間」と題し、スペンサーによる社会進化論と老子の中心思想である「道」との共通点を見出し、自由と創造について思索した偉大な啓蒙思想家である厳復の姿を明らかにしました。続いて、日本学士院会員の水田 洋本学名誉教授が、社会思想史研究者という独自の視点から、東アジアにおける西洋近代思想の受容とその意義について講演しました。

それぞれの講演後には、活発な質疑応答が行われ、参加者からは、「素晴らしかった」、「良い刺激になった」との感想が多数寄せられ、大変有意義なものとなりました。

## 国際産学官連携セミナーを開催

国際産学官連携セミナーが、2月12日(火)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。これは、今年度が最終年度となる文部科学省イノベーションシステム整備事業「大学等産学官連携自立化促進プログラム」の一環として開催されたもので、82名の参加がありました。



会場の様子

初めに、濱口総長から開会のあいさつがあった後、里見朋香文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長から産学官連携の施策について紹介がありました。

次に基調講演として、ケビン・ナベット駐日英国大使館一等書記官が、英国における大学に対する科学技術政策について解説を行い、また、ステイーブン・ハーン ボーイング社研究開発担当マネージャーが、グローバルな技術協力のモデルの進化について紹介しました。

次いで、ラッセル・トーマス米国ノースカロライナ州立大学技術移転局起業推進部長から産業界との連携による大学発ベンチャー活動の強化について、キム・ヒテ韓国科学技術院(KAIST)産学連携リーダーから韓国の大学における産学連携のねらい及び今後めざすべき戦略について、それぞれ講演がありました。引き続き、阿部正廣産学官連携推進本部国際連携部長から本学の国際産学連携活動の全般について、神山知久NPO法人名古屋大学テクノロジー・パートナーシップ所長から米国での成果及び今後に向けた取り組みについて、紹介がありました。

最後に、産学官連携推進本部長である松尾副総長が閉会のあいさつを行い、盛会のうちに終了しました。

## シンポジウム「バイオインフォマティクスのパラダイムシフト」を開催

シンポジウム「バイオインフォマティクスのパラダイムシフトー30年後の生命科学の姿を描いてー」が、1月25日(金)、ES総合館ESホールにおいて開催されました。

これは、日本学会等との共催で行ったもので、北海道から福岡まで各地からの参加者は110名を超え、大学関係者のみならず、研究所、民間企業、科学技術振興機構な

ど幅広い層から関心が寄せられ、学内からも理工系のほとんどの研究科から参加がありました。

シンポジウムでは、最近新しい原理に基づく配列解析装置が開発され、生命科学に革命的なインパクトを与えつつあることを受けて、それに対応する新しい情報解析の学問的流れを作り出すことを目的とした活発な議論が行われました。

6件行われた講演では、DNA塩基配列を中心とした1次元情報や細胞イメージングの3次元情報等のビッグデータをいかに解析し、生命の原理の解明と社会貢献につなげるかなど、主に3つの側面からバイオインフォマティクスの将来が議論されました。

さらにパネルディスカッションでは、研究所の機能としての人材育成や研究所の体制にも触れて活発に議論が行われました。



パネルディスカッションの様子



# 姉妹をつなぎ合わせる仕組み

西山 朋子  
 高等研究院特任講師

私たち生物のゲノムは、染色体という形をとって次世代の細胞に継承されていきます。真核生物において、ゲノム DNA はクロマチンを基本とする高次構造をとることで、わずか直径数マイクロメートルの細胞核の中に収納されています。核の中で複製されたゲノムは、分裂期においてさらに数千から一万倍に凝縮し、分裂期染色体を形作ります。これらの分裂期染色体は、長さ数マイクロメートルの分裂期スピンドルの中央に並べられ、微小管によって両極、つまり二つの娘細胞へ均等に分配されます。このようなゲノムの複製から、凝縮・分配に至る一連の染色体構造変化のメカニズムは、染色体の凝縮と分配が初めて観察されて以来一世紀以上を経た今に至っても、その一端が解明されているにすぎません。

私達の研究室では、正確な染色体分配に必須の染色体構造変化のメカニズムを明らかにしようとしています。たとえば、染色体分配にとって最も重要なイベントの一つが、姉妹染色分体間の接着 (Sister chromatid cohesion) です。姉妹染色分体間が接着されることではじめて、微小管によってスピンドルの両極より捕捉された染色分体間に均等な張力が生み出され、これが染色体分配の引き金をひきます。この接着を担うのが、コヒー

シンとよばれるリング状のタンパク質複合体です (図1)。コヒーシンは分裂期染色体上においてはセントロメア領域に局在してその接着を維持し (図2)、全ての染色体がスピンドル赤道面上に整列するのをきっかけに、コヒーシンリング上の Scc1 が一斉に切断され、染色体が分配されます。この構造的にも機能的にも魅力的なコヒーシンリングが、果たしてどのように DNA に結合し、またどのように姉妹染色分体間を繋ぎ止めているのか、その詳細は分かっていません。私たちは哺乳動物細胞やアフリカツメガエル卵を用いて、この接着のメカニズムを明らかにすることを目指しています。また従来の細胞生物学的・生化学的な手法では分子集団としてしか捕らえられなかったコヒーシンの挙動を、一分子レベルで観察できる系を確立し、DNA との相互作用機序や細胞周期に依存した分子動態の変化を明らかにしようとしています。私達の研究によって接着のメカニズムが理解できるだけでなく、近い将来、染色分体間が接着する瞬間を顕微鏡下で観察することができるようになるかもしれません。

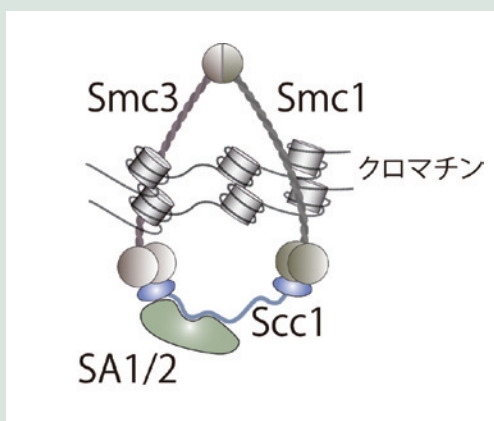


図1 コヒーシン複合体のリングモデル  
 コヒーシン複合体は Smc1, Smc3, Scc1, SA1/2 の 4 つのコア因子から形成されているリング状の複合体である。2本のクロマチンがどのように繋ぎ止められているかは未だに明らかになっていないが、図に示すように2本のクロマチンが1つのリングの中を通っているリングモデルが一つの有力な候補として提唱されている。

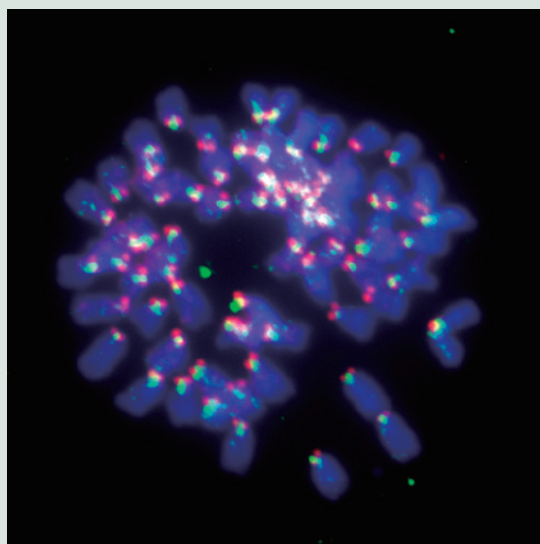


図2 セントロメア領域に局在するコヒーシン  
 コヒーシン (緑) は分裂期染色体上 (青) においては、セントロメア (中央) 領域とよばれる部位 (マゼンタ) に局在し、そこで微小管による牽引力に耐えながら接着を維持している。このときに生まれる張力が、染色体分配の引き金をひく。

# 西暦1千年紀の世界システム論

佐藤 彰一 高等研究院特任教授

歴史学とは何か、いやそもそも「歴史とは何か」という問いは、あまりに身も蓋もない問いかけであり、訊かれたほうとしても問題を立てるのに窮する。フランスの中世史家として名高い一代の碩学マルク・ブロックは、「歴史における真実とは、最良の歴史家が真実と考えたものだ」と、まるでポスト・モダンを50年先取りするような認識を述べているが、これは実は最良の歴史家が誰かということに当該分野、あるいは当該問題について一致した合意があれば、実はそれほど的外れな見方ではなく、常日頃の学問実践でわれ知らず振りど

ころにしていることと実感するのである。

2期合わせて10年におよぶCOEプロジェクトでの「テキスト学」への沈潜は、歴史とはナラティヴ、語りの作法であるという認識を確信させてくれた。まず「出来事」としての事実がある。様々な分析手段を用いて事実を確定する。だがこの事実、出来事は、それ自体は意味に対して基本的にニュートラルである。それが意味を持ち始めるのは、歴史家はその出来事をどのようなコンテキストのなかに位置づけるかを定めたときである。ある歴史的な問題を構成する事実や出来事



フランス学士院碑文・美文アカデミー年次荘重儀式（2012年11月30日）の折にビエール・トゥベール会員と



を仮に点とすると、全体を構成する多数の点と点をどのようにして線で結ぶかがナラティブ、語りである。あるいは叙法と云ってもよい。出来事をどのように意味づけるか、あるいは解釈するかによって、どの点とどの点を結ぶか、その仕方や順序が変わってくるのである。厄介なことに、そもそも事実をとらえる物差しも目盛りが一様ではない。ジャック・ルヴェルは「尺度の戯れ jeux d'échelles」と形容したが、小さな村単位の大縮尺の歴史と、文明史のような小縮尺の大きな単位で見る歴史では、対象にする事実、出来事が異なる。歴史の語りに均質性と一貫性を求めるならば、「事実の尺度」の統一性は保たなければならない。

私が現在「高等研究院プロジェクト」として取り組んでいるのは、世界システム論である。だがそれは、よく知られた近代世界システム論ではない。紀元前3千年紀頃に始まる世界システムを、16世紀の近代世界システムまで繋げる壮大なプロジェクトが、世界の先端的な歴史研究の動向としてあるが、その一翼を担うべく立ち上げたプロジェクトである。残念なことに、わが国ではこうした動向はほとんど知られていない。その遠因として、歴史のパースペクティブがあまりにスペンサー流の社会進化論的発想に縛られていて、無意識のうちに拒否反応を示しているところにある。私も社会が発展進化することを否定するつもりはないが、翻って紀元前の人間の知力とかれらの社

会が、途方もなく遅れていたと考えるのもどうかと思う。法典で有名なハンムラビ王に滅ぼされたメソポタミアの都市国家マリで発掘された2万点に及ぶ粘土版行政文書は、この都市国家の統治の精緻さ、商業、金融活動の盛んなさまを示して余すところがない。「持参人払い手形」制度さえあったのである。

つい1ヶ月前にフランスの人類学者フィリップ・ボジャールが2巻本の『インド洋世界』という研究書を出版した。これは、先に述べた紀元前3千年紀から紀元後16世紀までの、インド洋を軸にした世界システムの興亡を体系的に論じた世界最初の著作である。2巻で1500頁、大判で上質紙を使った印刷ということもあり、重さは合わせて8キロに近い。文献目録の部分だけで150頁もあり、古代オリエント時代からの世界システム研究が、すでに途方もない厚みを具えていることが実感されるのである。目下私は全国のイスラーム、インド、東南アジア、中国の古代史、中世史の専門家の協力を得て、西暦1千年紀の世界システム論の共同研究を準備中であるが、このボジャールの大作からは近代以前の世界システムを考察する枠組みやアプローチの方法など多くを学べるにちがいないと考えている。試論ではあるが、カール大帝を当時の世界システム論の関連で論じた小著が、4月に山川出版社から出る予定である。これまでのカール大帝像を何ほどか新たにしたいものである。

履 歴：早稲田大学大学院博士課程単位取得  
日本学士院会員 フランス学士院碑文・美文アカデミー  
連携会員

モットー：愚直に

趣 味：趣味というより習慣、あるいは悪癖に属するが、就寝時に国際インテリジェンス小説を邦訳前に英語で読むこと。最近では南沙諸島や台湾をめぐる米中が限定戦争を展開するトム・克蘭シーの『脅威のベクトル』。

さとう しょういち



# 理学部創設70周年記念行事を開催

●理学部



大沢名誉教授による講演の様子

理学部は、1月18日(金)、理学南館大講堂において、理学部創設70周年記念講演会を開催しました。これは、昭和14年の名古屋帝国大学設立時から設置されていた理工学部が、昭和17年に工学部と理学部に分離してから70年目を迎えたことを記念し、開催されたものです。

講演会は、篠原理学部長のあいさつに始まり、濱口総長から祝辞が述べられた後、同学部に縁のある3名が講演を行いました。大沢文夫本学名誉教授が「昔話と今の想いー生きものらしさ」、益川敏英本学特別教授が「現代社会と科学」、野依良治本学特別教授が「『科学立国』日本を担う学生諸君へ」と題し、1人ずつ登壇しました。

各講演者は、スライドを使うなどして、自身が研究者を志すきっかけとなった幼少期や学生時代の経験、恩師や研究者との出会いや心に残っている教え、研究設備が不整備な環境の中で研究を行った苦労などを懐かしみつつ語り、時には会場の笑いを誘いました。講演者それぞれの独自の語り口は、より一層の興味を惹くものがあり、大学関係者、多数の名誉教授及び学生など約300名の参加者は、全ての

講演に大変熱心に聞き入っていました。講演者はまた、在学生へ助言を述べるなどして、後輩の活躍や進歩し続ける研究の未来にさらなる期待を寄せました。

講演会終了後は、野依記念学術交流館に会場を移し、懇親会が行われました。篠原学部長のあいさつにはじまり、國枝副総長の発声で乾杯を行い、益川特別教授、野依特別教授、福村裕史東北大学理学部長及び山下廣順本学名誉教授が祝辞を述べました。

懇親会は、会場で上映された理学部の歴史を感じさせるスライドを見ながら当時を振り返り歓談したり、参加学生が積極的に研究者へ質問及び議論したりする中、大変盛況のうちに閉会しました。



講演する益川特別教授



懇親会で学生から質問を受ける野依特別教授



## 第16回名古屋ビジネスセミナーを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、2月13日(水)、日本経済新聞社名古屋支社会議室において、経済学部同窓会である社団法人キタン会との共催で、第16回名古屋ビジネスセミナーを開催しました。

同センターは、大学院経済学研究科と緊密に協力しつつ、領域横断型の研究を開拓し、その成果を内外の大学、研究



講演する渋谷教授

機関をはじめ広く社会に還元することを任務としています。同セミナーは、その一環として地域に開かれた研究活動を推進することを目的としており、今回は、渋谷健司東京大学大学院医学系研究科国際保健政策教室教授を講師として開催しました。

佐藤宣之国際経済政策研究センター教授の司会のもと、まず木村経済学研究科長が開会あいさつを行い、続いて、渋谷教授より「グローバル化する保健医療」と題して講演がありました。渋谷教授は、従来各国に固有であった保険医療についても、グローバル化の中で先進国・途上国間での双方向の連携が必要となり「グローバルヘルス」の概念が生み出されたこと、グローバルヘルスの進展とともに世界保健機関（WHO）のみならずその他の国際機関や民間セクターの存在感が増していること、日本が達成した国民皆保険こそがグローバルヘルスの中心課題となりつつあり、持続可能なビジネスモデルの開発に向けて我が国がリーダーシップを取ることが期待されていることについて説明しました。最後に多和田同センター長による閉会あいさつで終了しました。

WHOでの勤務経験等もふまえた渋谷教授の講演は、聴衆に知的刺激を与えているようでした。

## 平成24年度医学部附属病院災害訓練を実施

●医学部附属病院

医学部附属病院は、2月12日(火)、平成24年度医学部附属病院災害訓練を実施しました。

同訓練は、駿河湾沖を震源とする震度6強の地震が発生し、医学部附属病院のライフラインの一部が破損しているという状況のもと、被災者等が同院に多数来院したとの想定で実施されました。同院職員が、自身の安全を確保しつ



あいさつをする松尾病院長

つ、来院する患者に対して、トリアージから処置・搬送をいかに手際よく正確に行うかの訓練を行いました。

今回は、現在改定作業中の新しい防災マニュアルを意識し、前回、外来棟4階のホールに設置していた対策本部を、新しい防災マニュアルにおける設置予定場所である中央診療棟3階の講堂とするなど、訓練に様々な改良を加えて実施しました。さらに昨年に引き続き、学校法人・専門学校名古屋医専の協力のもと、同校の専門学校生80名を模擬患者として、より実際の現場に即した訓練を行いました。

訓練終了後、参加者は対策本部の置かれた中央診療棟3階の講堂に集合し、松尾医学部附属病院長のあいさつの後、部署ごとに分かれて、各ブース内の連携や患者の搬送等それぞれの問題点を洗い出し、報告を行いました。その後、訓練の監査にあたった昭和消防署の担当者から講話があり、松尾同院長の代理として松田直之同院救急部長が専門学校生の代表者に感謝状を授与して、訓練を終了しました。

今回報告された問題点を受け、次回の訓練ではさらに内容の充実を図る予定です。

## ウィーン医科大学と合同シンポジウムを開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、1月28日(月)、オーストリアのウィーン医科大学において、同大学との共催で、神経疾患と腫瘍に関する合同シンポジウムを開催しました。これは、同大学と最新の学術的交流を図り、今後の神経疾患と腫瘍に関する共同研究を進展させることを目的として開催されたものです。



シュッツ学長との面談の様子

シンポジウムは、カリン・グティエレス・ロボス ウィーン医科大学副学長のシンポジウムへの期待を込めた歓迎のあいさつで幕を開けました。本学からは、高橋医学系研究科長ら7名が参加し、神経の変性疾患と再生、精神疾患の遺伝分子メカニズム、脳腫瘍、腫瘍溶解性ウイルスを用いた橋渡し研究など、幅広い分野について、様々な角度から講演が行われました。当日は、大学生、研究者をはじめとする多くの人々が参加し、熱心に講演に耳を傾けていました。講演後には積極的に質疑が行われ、盛況のうちに幕を閉じました。

翌29日(火)には、一行はウィーン医科大学の研究施設及び附属病院を見学しました。その後、ウォルフガング・シュッツ 同大学長と高橋研究科長が面談し、今後の両大学間のさらなる学術的交流について意見を交換しました。

今回の訪問を機に、より多くのウィーン医科大学の学生が本学の大学院医学系研究科に興味を抱き留学することで、両大学間の交流が一層促進されることが期待されます。

## 複合材シンポジウム13を開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科附属複合材工学研究センター(CERC)は、2月15日(金)、野依記念学術交流館において、複合材シンポジウム13(テクノ・シンポジウム名大)を開催しました。同シンポジウムは、同センターが発足して以来5回目の開催となります。

最初に、鈴置工学研究科長からあいさつがあり、次に、



会場の様子

石川工学研究科附属複合材工学研究センター長から、4月に立ち上がるナショナルコンポジットセンターとCERCの役割の違いについて話がありました。また、来賓として、大橋良輔中部経済産業局地域経済部長より、産官学連携の官の立場からのあいさつがありました。

2件の講演では、トヨタ自動車株式会社の複合材技術担当者より、炭素繊維複合材(CFRP)で作られた自動車のボディーの紹介とその成形の仕方、軽量化の成功等について話がありました。また、産業技術総合研究所中部センター無機複合プラスチック研究グループの担当者より、炭素繊維強化複合材料のマトリックス樹脂に着目した研究の報告がありました。その後、岩崎 豊宇宙航空研究開発機構(JAXA)研究開発本部複合材技術研究センター長より、JAXAとCERCとの研究連携の報告があり、CERCの担当者より研究成果の発表報告がありました。

シンポジウムは、公開自由参加の形で行われましたが、地域密着型の研究拠点を形成するという同センターの設置目的を反映して、中部地区の複合材料に関心を持つ企業から多くの参加者がありました。企業からの参加者より質問が活発に行われ、研究成果を広報する場、産学交流の場として有意義な機会となりました。



## 第25回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、1月16日(水)、17日(木)の2日間、野依記念学術交流館において、第25回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催しました。

同センターは、学内外を問わず、地球誕生から現代に至る年代範囲をカバーする年代学研究、放射性炭素 C-14 トレーサーを用いる環境炭素動態に関する共同研究に貢献し



会場の様子

ています。

シンポジウムでは、同センターの年代測定設備に関する平成24年の現状と利用を概観した後、本学のほか、静岡大、岐阜大、愛知教育大、金城学院大、福岡大、宮崎大及び元興寺文化財研究所などの研究者による共同利用の成果として、環境学、地質学、考古学、文化財科学、人類学などの分野に関する口頭発表32件、ポスター発表8件を行いました。

また、北川浩之環境学研究科教授が、福井県水月湖湖底の年縞堆積物を用いた C-14 年代から暦年代への換算に用いるデータセット構築の歩みとその間に直面した諸問題について、増田公明太陽地球環境研究所准教授が、年輪中の C-14 濃度の 774-775 年の急増の発見と超新星爆発や太陽巨大フレアの関連性について、中田敦之長崎県松浦市教育委員会課長が、松浦市鷹島沖にて発見された元寇船の出土状況について、宇田津徹朗宮崎大学教授が、東アジアにおける水田稲作技術の成立と発展に関する研究とプラントオパール微化石解析の貢献について、特別講演を行いました。

103名の参加があり、講演や総合討論において活発な質疑応答、意見交換が行われました。シンポジウムの内容は、業績報告書として3月中旬に刊行される予定です。

## 第9回次世代自動車公開シンポジウムを開催

●グリーンモビリティ連携研究センター

グリーンモビリティ連携研究センターは、2月8日(金)、野依記念学術交流館において、第9回次世代自動車公開シンポジウムを開催しました。

今回は「製品開発のマネジメント」をテーマに、産業界から3名の講演者を招いて行われ、企業、公益法人、大学関係者など100名を超える参加がありました。また、同シ



会場の様子

ンポジウムは独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) の委託事業の一環として行われました。

初めに、小野木グリーンモビリティ連携研究センター長よりあいさつがあり、続いて、稲垣公夫グローバルリング株式会社代表取締役より「欧米が理解しているトヨタの製品開発システム」、豊島浩二トヨタ自動車株式会社製品企画本部 ZF チーフエンジニアより「実際の CE の仕事、開発チームのマネジメントについての事例」、原嶋 茂株式会社デンソー生産技術部 PALAP 事業プロジェクト室担当次長より「グリーンモビリティやエコファクトリーへつながった製品技術・生産技術開発とそのマネジメント」と題した自動車業界の動向についての講演があり、参加者は熱心に耳を傾けていました。

その後、小沢 浩経済学研究科教授を座長に、講演者の3名と、原口哲之理同センター特任教授、辻 信一同センター特任教授の計6名で、参加者との質疑応答を盛り込んだパネルディスカッションが行われ、白熱した議論が展開されました。

シンポジウム後に開催された技術交流会でも、熱心な意見交換は続き、終始白熱した雰囲気でした。

## 第86回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、1月30日(水)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第86回防災アカデミーを開催しました。

今回は、北原糸子立命館大学歴史都市防災研究センター教授が「三陸津波の歴史と村の復興」と題して講演し、約100名の参加がありました。



講演する北原教授

講演では、まず、三陸地方の津波災害の歴史として、東日本大震災との比較を交えつつ、明治三陸津波と昭和三陸津波の特徴と被害の説明がありました。明治三陸津波については、被害調査を行った山奈宗真氏が残した言葉や調査内容が、昭和三陸津波については、岩手日報の記事が紹介され、具体的な被害の様子が示されました。

続いて、過去の三陸津波からの復興事例について、当時の復興に関する考え方や実際の課題、家屋移転の様子が説明され、最後に、津波碑が作られた経緯・背景や津波碑の写真とその内容が示されました。

北原教授は、津波災害の最大の敵は、人々がそれを忘れてしまうことであると述べました。

## 名古屋シンポジウムを開催

●細胞生理学研究センター

細胞生理学研究センター (CeSPI) は、1月22日(火)から24日(木)までの3日間、豊田講堂において、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) との共催で、名古屋シンポジウムを開催しました。

「構造生理学におけるフロンティア」というテーマのもと、ノーベル賞受賞者であるブライアン・コビルカ及び



自作した電子顕微鏡の心臓部を説明する藤吉センター長 (右)

ロデリック・マキノンの両氏をはじめとした構造生理学分野をリードする多くの研究者を招き、世界中から総勢500名を超える研究者の参加を得て、活発な議論が行われました。本学からも、濱口総長、松下副総長らが参加しました。

同シンポジウムはまた、センターの設立を記念して開催されたものでもありました。同センターでは、藤吉細胞生理学研究センター長の「研究者が自らの発想に基づいた研究を、自由闊達かつ長期的視点で行うことのできる、国際的で独創性の高い教育研究組織の設立」という理念に基づき、本学で先駆的に進められている最先端の医療研究及び創薬研究と連携することで、「細胞構造生理学」という新たな分野の研究を行います。シンポジウムのオーガナイザーであるトマス・ウォルツ ハーバード大学医学部教授が「このような素晴らしい研究者が一堂に会する学会は、この分野では初めてではないか」と話したとおり、同シンポジウムは藤吉センター長の理念に賛同した多くの秀逸な研究者の参加により実現しました。

同センターの英語名CeSPIは、「Cespitose(植物の群生)」というギリシャ語に由来します。同シンポジウムにおける最先端の科学者と若手研究者との交流が、研究者と研究成果の「群生」へと繋がるのが期待されます。



## 特別講演会「地球温暖化問題の今後を考える」を開催

●グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」

グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」は、1月22日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、特別講演会「地球温暖化問題の今後を考える」を開催しました。

講演会では、プリンストン大学招へい上級研究員で、地球温暖化研究の第一人者である真鍋淑郎本学特別招へい教

授が「地球温暖化で今何が問題か?」、総合研究大学院大学教授で、科学と政治の関係でユニークな論を展開する米本昌平本学客員教授が「地球温暖化問題と変質する国際政治」と題して講演を行い、続いて同プログラム拠点リーダーである安成哲三地球水循環研究センター特任教授及び同プログラム副拠点リーダーである林良嗣環境学研究科教授を加えた4名でパネルディスカッションを行いました。

真鍋特別招へい教授は、地球温暖化予測の不確定性の問題はまだまだあるが、温暖化は確実に進行しており、特に世界各地の降水などの水循環変動に大きな影響が出ることを強調しました。米本客員教授は、国際政治の中での地球温暖化問題が、中国などの新興国における温室効果ガス排出の増加などで大きく変わってきたこと、特に東アジアでの環境問題における協力体制が非常に重要になってきたことなどを主張しました。パネルディスカッションでは、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の最近の知見もふまえた水循環変化予測の問題点や、気候変化がアジアの巨大都市に与える影響評価の重要性なども指摘されました。

参加者は学内外から約100名にのぼり、一般市民も含めて熱心な質疑が行われ、盛況でした。



パネルディスカッションを行う真鍋特別招へい教授(左)と米本客員教授(右)

## 大学文書資料室シンポジウムを開催

●大学文書資料室、減災連携研究センター

大学文書資料室及び減災連携研究センターは、2月7日(木)、豊田講堂シンポジオンホールにおいて、大学文書資料室シンポジウム「東海大地震からアーカイブズをどう守るべきかー震災への保存と地域連携を考えるー」を開催しました。これは、近い将来の発生が確実視されている南海トラフ巨大地震から、東海地方の、主に民間に存在する歴

史資料を守る方法を議論すること目的としたものです。

初めに、福和減災連携研究センター長が開会あいさつを行い、次に、奥村弘神戸大学教授、大国正美神戸新聞編集局長、西村慎太郎国文学研究資料館准教授による講演と、3件の講演に対する山中佳子環境学研究科准教授からのコメントがありました。その後休憩をはさみ、奥村教授、大国次長、西村准教授、山中准教授をパネリストとする討論を行いました。

討論では、参加者からパネリストへの個別質問の後、来たるべき大地震に備えて、大学(研究者)、行政(資料館や図書館などのアーカイブズ保存機関)、歴史資料所有者などによる地域ネットワークづくりのあり方などについて、パネリストを中心に活発な議論が行われました。最後に、池内大学文書資料室長がシンポジウムを総括して終了となりました。平日の午後の4時間半にわたる長丁場にもかかわらず、60名の参加がありました。

同シンポジウムの講演及びコメントの詳しい内容については、3月に刊行予定の「名古屋大学大学文書資料室紀要」第21号に掲載される予定です。



会場の様子

## 展示会「ノートの中の青春」を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、10月23日(火)から1月18日(金)までの間、医学部分館において、展示会「ノートの中の青春－講義ノートが伝える医学生の歩み－」を開催しました。

これは、同館内にある医学部史料室の所蔵品の中から、明治及び大正時代に、本学医学部の前身校である愛知医学



展示会の様子

校、愛知県立医学専門学校及び愛知医科大学で学んだ学生による手書きの講義ノートを表示する企画です。数学、解剖学、外科学、産科学、眼科学などの講義ノートには、ドイツ語も交えた個性豊かな筆致や、胎児の様子や指の仕組みなどを克明に描いたスケッチ、機知に富んだ落書きなど、当時の学生の勉学の痕跡がそのまま残されており、「若者たちの息遣いまで聞こえてくるようだ」と多くの来館者の関心を集めていました。

展示会では、関連資料として、明治9年に公立医学講習場へ着任した外国人教師アルブレヒト・フォン・ローレツ氏が、4年後に離任する際に惜別の辞として残した自筆の格言「Was Hänschen nicht lernt, Lernt Hanns nimmermehr. (意訳：少年老い易く学成り難し)」や、イギリス公使医員ウィリアム・ウィリス氏の指導を受けて、戊辰戦争に従軍した日本人医師が銃創治療にあたった時の記録で、クロロフォルム麻酔による手術を記載したわが国最初の記録とされている「北越従軍銃創図録」、さらに当時の学生や授業風景の写真、教科目変遷の資料、明治時代の医学校と病院の平面図なども展示し、来館者から好評を得ました。

## 博物館企画展「なんじゃ?もんじゃ?～高木典雄とコケの世界～」を開催

●博物館

博物館は、11月23日(金)から2月2日(土)までの間、第25回博物館企画展「なんじゃ?もんじゃ?～高木典雄とコケの世界～」を開催しました。

同展は、本学教養部の教授で、世界的に有名な蘚類研究者であった故高木典雄氏と、同氏が発見したナンジャモンジャゴケを紹介するため開催されたものです。ナンジャモ

ンジャゴケは、「植物分類学にとって20世紀最大の発見」と評価する研究者もいるコケで、同展では、ナンジャモンジャゴケがなぜそれほど重要なのか、また、そのようなコケをなぜ高木氏が発見できたのかということを中心として、学内で現在進んでいるコケ研究なども展示し、研究者の生き様やコケの面白さを紹介しました。

高木氏のコケ研究に使われた資料や道具、ナンジャモンジャゴケをはじめとする各種コケの実物やレプリカのほか、同氏が集めた果実コレクションなど様々な標本を展示しました。また、杉田 護遺伝子実験施設教授、木下俊則理学研究科教授及び青木撰之情報科学研究科准教授の各研究室の協力のもと、コケを使って行われている最先端の研究を紹介するパネルや、フラスコで培養したコケの展示も行いました。

若い学生から年配の方まで様々な方が来場し、来場者一人ひとりの滞在時間が長いことも今回の特徴でした。

さらに、12月8日(土)には、鳥取県立博物館の有川智己氏が「なんじゃもんじゃゴケ?」と題し、1月12日(土)には、国立科学博物館の樋口正信氏が「苔 こけ コケ」と題して講演し、それぞれ、未だ謎に包まれたナンジャモンジャゴケの解説と多種多様なコケの紹介を行いました。



展示の様子





## 名古屋大学を去るにあたって

杉浦 一孝 大学院法学研究科教授

私は、本年3月31日をもって名古屋大学を定年で退職します。

私が所属した法学部（後は、大学院法学研究科）は、創設以来、自由闊達な学風のもとで、既成の権威や価値観にとらわれることなく、研究教育を進めてきている部局です。私がこのような部局で研究教育に携わることができたのは、これまで法学部（大学院法学研究科）の発展に尽力された先生方や現在の同僚の皆さんのおかげだと思っています。

国立大学は、1990年代の後半から徐々に変わってきましたが、その質的な変化をもたらしたのは、言うまでもなく、2004年の国立大学の法人化です。これが国立大学の組織運営・研究教育のあり方を効率優先の方向に変えるものであったことは、その後の名古屋大学を含む国立大学の実態が示し

ているとおりです。大学院法学研究科の場合、同年に実務法曹養成専攻（通称・法科大学院）を設置したこともあって、それ以降、教職員の多忙化現象が顕著になってきました。さらに、獲得することが至上命令になっている外部資金を獲得すればするほど、とくに教員は、本来の研究のほかに、部局の研究教育プロジェクトに追われ、超多忙な毎日を送らざるをえない状況にあります。

外部資金を獲得すれば、本来の研究時間が減るということは、由々しき事態です。大学には、このような本末転倒な状況を抜本的に打開する策が今こそ必要ではないでしょうか。



## 専門分野を超えた交流

松浦 好治 大学院法学研究科教授

名古屋大学には、2000年に赴任しました。

まず、教育学の専門家と一緒に新しい電子シラバスを考え、次に、情報科学の専門家とe-portfolioの分析、さらにはITを使った日本法令の翻訳（現在は、漢字文化圏の法情報の共有と比較研究）を推進し、経済学の専門家とは、法と経済学を留学生相手に英語で教えたりしました。地質学や歴史学の専門家とは、図書館や地域連携の仕事をしました。

専門分野を超えた交流を通じて、私の名古屋大学での人生は本当に豊かになりました。法整備支援などのプロジェクトでは、世界各国の大学や専門家、学生と一緒に仕事をすることができました。

総合大学が本当に総合的になるには、専門分野を超えた交流が大切です。名古屋大学を起点にして、学内、学外でまず

豊かな交流環境が育っていくよう願っています。

名古屋大学の皆様 に厚く御礼申し上げます。



## 行雲流水

岸田 民樹 大学院経済学研究科教授

1980年に名大経済学部へ赴任して33年間、教員として過ごしました。三重県（津市）の出身ですが、名古屋は初めてでした。

専門は組織論です。当時、経営学の中で、組織論を専門とするのは、私1人だけでした。そのため、研究も教育も、自由にやらせてもらいました。私は、Organizationは、OrganizingとOrganizedからなると考え、組織学は、Organizing（組織生成）の理論とOrganized（構造統制）の理論からなると主張しました。

教育では、学生時代に紛争を経験したため、新しい情報を学生に提供するよう努めました。しかし、一向に学生は振り向いてくれず、10年で挫折し、次の10年は、できるだけわかりやすく、表や図を使って講義するようにしました。それで

も学生の評判は悪く、結局10年で、また元に戻りました。自分の研究成果を講義で話すという最初のスタイルです。振り返ってみると、よく言えば試行錯誤、悪く言えば挫折ばかりの日々でした。それでも文系にしては多くの大学院生を指導しました。

評議員や研究科長も経験しましたが、組織論を専門とするにもかかわらず、色々な面で十分に調整できず、皆さんに迷惑をかけた。

終わってみると、何ごともなし得ず、右往左往していた33年間でした。しかし、自分の意志で自由に考えることができたことを、大変感謝しています。



## 定年退職を迎えて

多和田 眞 大学院経済学研究科教授

名古屋市立大学での16年間の勤務の後、1999年名古屋大学に赴任し、14年間の歳月が立ちました。40代までは自分の人生の長さは無限のように思って生活していましたが、名古屋大学に来てからは、残り10年余の限られた貴重な時間の充実した研究・教育の場にしたいと思ってやってきました。このような思いもあって、大学院の重点化や大学の独立行政法人化とめまぐるしく大学改革が進む中で、落ち着いて研究・教育に専念出来なかったことが多少心残りです。しかし、名古屋大学で、多くの素晴らしい研究者の方々や優秀な学生諸君に出会えたことは私にとって大変貴重な思い出です。特に学生諸君には私が教えること以上に彼らから学ぶことが多く、大変感謝しています。研究面では、高等研究院での3年間の研究専念期間を与えて頂いたことが特に印象に残っています。

す。この研究期間のおかげで、研究生生活のリフレッシュが出来、それなりの研究成果を上げることができました。

これからの名古屋大学に思うこととして、大学の予算削減の中で、外部資金獲得のための研究に追われている研究者の現状は好ましい状況とはいえ、本当にしたい研究にしっかりと専念できる研究環境の充実や、大学院の重点化以来、マスプロ教育化で質的低下が懸念されている大学院教育において、少数精鋭の英才教育にも力を注いで頂きたいと思います。

名古屋大学のこれからの益々のご発展をお祈りいたします。



## 仲間に恵まれた名古屋大学時代

平川 均 大学院経済学研究科教授

定年を1カ月後に控えて、はたと考え込んでしまった。何を書いたらいいのかと。2000年秋に名古屋大学の経済学研究科附属国際経済政策研究センター（当時、国際経済動態研究センター）に赴任して、それ以後は矢のように時間が過ぎた。気づけば定年を迎えている。大学の法人化、所属センターの存続問題もあった。大学は地域社会への貢献は勿論、国際社会での競争に直接晒されるようになった。学年暦もそれほど遠くない将来、秋から始まるようになりそうである。グローバル化の中でどうランクを高めるかが、大学指導部にとっては最大の課題だろう。そんな時期を名古屋大学で過ごした。

グローバル化への対応の課題は、専門がアジア経済であったこともあり考えてきた。そこから出てきた自分なりの回答は、アジア地域の研究者と共同研究を深めるというもので

あった。名古屋時代の後半はそんな考えの下に仲間を探す期間だったように思う。信頼できる研究者とのネットワークが出来始めたと思い始めた時、定年が待っていた。人生とはそんなものなのだろう。激変する環境の中で夢を追うことができただけでも、名古屋大学時代は私にとって幸せそのものであった。

同僚、学生や職員の方々にも大変にお世話になった。振り返れば、親身になって助けてくれた教職員の方々が心に浮かび上がる。今後もこの感謝の気持ちを忘れないようにしたい。名古屋大学の益々の発展を心よりお祈り致します。



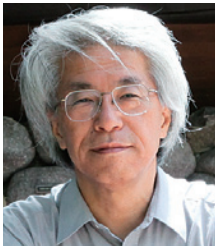
## 研究生生活を振り返って

大澤 幸治 大学院理学研究科教授

私は本学の理学研究科で学位を得た後に、プラズマ研究所、プラズマ科学センター、そして1995年からは理学部にお世話になりました。所属場所はキャンパス内の1km弱の距離を行ったり来たりしていたこととなります。ただし、プラズマ研究所時代に2年間の米国留学という大変貴重な経験をさせていただきました。非社交的な私ですが、何故か米国生活がとても楽しく、それだけに短い滞在期間にも関わらず、深甚な影響を受けたように感じます。40年近い研究生生活のうちの前半、まだ若い時代に研究所やセンターで研究に専念し、経験をいくらか積んだ後半の時代に理学部で学生さんの教育を行うとともに彼らと一緒に研究をできたことはよかったと思います。活力あふれる彼らと共同研究ができたことに感謝しています。

若い時代には2、3年ごとに新しい研究テーマに取り組んでいましたが、30代半ばで「衝撃波と粒子加速」という1つのテーマに目標が定まり、結局定年までそれを研究することになりました。自分自身のライフワークとよべるようなテーマに出会えたのは研究者として幸運であったと思っています。それにしても研究の原動力の1つに、日本や米国における私の恩師に対する憧れと尊敬の念があったことは確かです。立派な師に巡り合えたことこそ大きな幸運でした。





## 感想

近藤 孝男 大学院理学研究科教授

定年に際し感想を書け、ということですが、いろいろあったなという想いが先行し、なかなかまとまりません。18年前に名大に戻った時には予想もなかったことがいろいろあり、長かったようで、短いような感じに捉われます。いつかくる定年の時には、静かに来し方行く末を考えてみたいと思っていました。現実には、例年と全く同じような速度で時間が流れていきます。

とはいえ、改めて思えば、これまでの皆さんのご厚情に感謝の気持ちが最初に浮かびます。何と言っても研究室に来てくれた多くの若い人たちに感謝します。本当に楽しい時間が過ごせたと思います。もちろん理学部や高等研究院の先輩や同僚、学会の仲間にも同じ気持ちですが、私の無能のせいで、頂いたご厚情に見合うことが出来なかったことを申し訳なく

思います。開き直るようですが、大学に入った初心を忘れるな、ということで私は精一杯だったように思います。振り返れば、随分と危うい時もあったのですが、よくわがままを通したものだというのが正直なところではあります。

こんなことはもうあまり長くは続けられないかと思ひますし、そうなることを内心期待もするのですが、今しばらくはこだわってみようと思っています。その後は、大学院の頃のように、朝起きて、今日も明日も今週も来週も自由で、ただ本を読み、音楽を聴いて、気ままに旅をしていた時のような、穏やかで充実した時間が戻ってくることを秘かに期待しています。



## 退職にあたって

西田 育巧 大学院理学研究科教授

名古屋大学には、19年間お世話になった。この間、キイロショウジョウバエをモデル系としてがん遺伝子をはじめ、進化的に保存された様々な遺伝子の発生過程における機能を解析して来た。予想どおりにうまく行った研究もあれば、うまく行かなかった研究もあり、反省するところ多々である。気がつくやうに定年を迎えていたという状況で、まだまだやり残したことがある。定年延長で、1年間余分に在職することが出来たことは幸いであった。その間、やり残した研究を少しでも行うことが出来、完遂したとは言えないが自分なりに満足することが出来たからである。

私がショウジョウバエをモデル系としてがん遺伝子の機能解析をはじめた頃は、ショウジョウバエ分子生物学の勃興期であった。いち早く新しい技術を取り入れ、日本のショウ

ジョウバエ分子生物学の興隆に幾ばくかの貢献が出来たと考えている。そして、これが益々発展し続けているのを見るのはまことに喜ばしいことである。

在職中に、桑畑やメダカの養殖地が姿を消し、いくつもの建物が建った。また、大学院重点化、法人化、GCOE、G30、リーディング大学院、WPIなど、新しい制度や事業が展開しつつある。私が赴任した頃と隔世の感がある。今後とも名古屋大学が益々充実・発展することを願っている。



## 基礎研究と教室制度

野崎 一洋 大学院理学研究科教授

私は、生まれも育ちも播州姫路ですが、大学は、東京の古い某旧帝国大学に入学しました。私が入学して1年後の1968年の春に、医学部紛争に端を発した学生による大学改革運動が起こりました。当時の1~2年は、自分にとっては、まさしく、青春の「疾風怒涛の時代」でした。この時代に出会ったのが、名古屋大学理学部物理学の坂田昌一氏の論集「科学者と社会」です。そこに書かれていた、古色蒼然とした古い旧帝国大学から新しい大学への改革の方向を示す「名大物理学教室憲章」に感銘し、名古屋大学大学院物理学専攻に入学しました。以来、民主的で、しかも、進取の精神に富んだ教室制度と研究室制度の御蔭で、非線形物理という一風変わった境界領域での理論研究を続けることができました。

この間、自分の基礎研究の結果が、実際に役に立つかどうか

かは、ほとんど考えなかったのですが、20数年前に数理的興味から見つけた、ある非線形散逸系の位相欠陥を含む解が、最近になって、心臓の心室を隔てる心筋の壁(心室中隔)上で観測されている膜電位の波動の位相欠陥を表す解となることが示されて、基礎研究における長期的視野の重要性を再認識しました。

国立大学の法人化以降は、毎年、研究成果の報告を要求される「せわしない時代」になりましたが、長期的な視野の必要な基礎研究を行っている研究者が圧迫されることのないような名古屋大学であり続けて欲しいと願っています。



## 名古屋大学病院の外科医として

安藤 久寛 大学院医学系研究科教授

手術という行為を境に患者さんが良くなっていくのがとても嬉しくて外科医になりました。「外科医は鋭敏かつ繊細で、気遣いの出来る神経の持ち主である必要がある。道具にも気を配らねばならない。自分が未熟であったために患者を不幸な目に合わせたことを決して忘れず、心の痛みとして持ち、今後の自分を磨く糧としなければならない。」と言われていました。この教えを胸に刻み外科臨床に携わってきたのですが、大学病院に於ける外科医は何をなすべきなのでしょう？

私は新たに設けられた小児外科教室の初代教授として就任した時に、(1) 手術成績の向上と症例数の増加 (2) 対象疾患や治療方法などに教室の独自性を出す (3) 治療方針はパターン化し一定数を経験後にその治療方針を見直し独自の術

式・治療法を確立する、という「臨床」と「独自性」に力点を置いた教室作りを目指しました。新術式の考案、症例を集めるための体制作り、手術手技向上のための研修システムの構築等を行った結果、症例数や特定疾患における治療成績では全国1、2を争う教室に成長し、有森裕子ではありませんが自分を褒めたい気分です。ただし、基礎研究が犠牲になってしまった事が大きな問題として残りました。満足感と心残りが混じってはいますが、名古屋大学で仕事ができたと誇りに思い心から感謝しています。

名古屋大学の益々の発展をお祈りし、退任の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



## 世界の中でキラリと輝く名古屋大学をめざしてください

曽我部 正博 大学院医学系研究科教授

脳における意識と心の発生機構の解明を目指して、阪大基礎工学部生物工学科に入学し、イオンチャンネルと脳の間を行き来しながら、16年間阪大に在籍しました。その後35歳で名大医学部生理学教室の講師として赴任し、29年間名古屋大学のお世話になりました。当時の理工系学部では「医学部にだけは行くな、昇進もないまま、こき使われるぞ」という風評がありました。しかし、幸いにもこうした事態にはならず、自由に思う存分研究をさせて頂き、感謝一杯の気持ちで定年を迎えることができました。

名古屋も名大も不思議な処です。東西に挟まれたブラックホールのように、今から何処に住み何処で働きたいかと問われれば、やっぱり名古屋で名大かなと言わせる、何かがあります。しかし、問題もあります。東大や京大が始めたので

我々もやるか、といったおっとり追従の気風です。そのため返って余裕がなくなり、疲弊して不完全燃焼に終わることがあります。その点、名大が現在進めている東アジアとの人材交流はユニークで素晴らしい試みです。このような焦点を絞った未来志向の異分野融合体制が定着すれば、名大はキラリと輝くさらに魅力的な存在になるに違いありません。豊かな資源と人材に恵まれたこの地に必要なのは、世界の先陣を切る気概で夢を語って先導する存在であり、それこそが名古屋大学の役割と信じます。

退職後も名古屋大学を応援し続けます。皆さん有り難うございました。



## 教わるのが良いか、教わらないのが良いか

梅村 章 大学院工学研究科教授

学生には其々にやってみたいことがあり、将来に対する希望もある。昨今の大学は、この多様性に応えるべく大きく変貌を遂げてきているかに見える。ここでは研究者を目指す学生に向け今の思いを記す。

「オンリーワンを目指せ」は、昔から大学で言われてきたことであり、私もそうありたいと思った。しかし、挑戦的な研究テーマに取り組むのは難しく、定年間際になってやっと若い時に挑戦してみたいと思った問題への独自の接近方法を見出したような気がする。これも大学で自由な時間が持てたからであるが、それにも増して学生に助けられた所が大きい。学生の研究指導では、恩師に見習い、学生には好きなことをしてもらってきた。それで、何が一番助かったかと言えば、私も密かに結果を予想するのであるが、多くの場合予想

を覆す結果を学生が出すからである。このとき、自分が依ってきた考えの誤りや不完全さが認識される。特に、偏見を持たず取りくむ学生の実験結果は有益であった。それで、学生と立場を入れ替えて考えるのだが、教わるのが良いか、教わらないのが良いか、これが教員としてずっと問うてきたことであった。有りのままを見ればわかるものを、教えられたがために重大な誤りを犯している例を見る機会も少なくなかったような気がする。

この経験より送りたい言葉は「自分の師を研究対象そのものに求めよ。曇りない目で向きあえば雄弁に語りかけてくれる」である。





## 定年退職にあたって

大久保 仁 大学院工学研究科教授

私は平成元年7月に名古屋大学工学部電気学科に赴任以来、23年9月にわたり、本学で教育・研究に携わって参りました。その間、多くの優秀な学生・卒業生とともに、大学の同僚はじめ国内外の大学・研究機関・学会・産業界の皆様との共同研究などでご協力をいただき、研究室の教員・スタッフの献身的支援のもと、今日まで有意義な日々を送ることができました。

大学を卒業してから16年3カ月にわたり、私は企業の研究所で高電圧・電力機器に関わる基礎研究および応用開発を行ってきました。平成元年から母校である名古屋大学に移ってからは、企業時代に培った技術基盤に基づき、その経験を活かしつつ、学生たちとともに基本に立ち戻って電気・電子にかかわる基礎・応用研究を行ってきました。また将来の安

全・安心スマート社会の構築に必要な技術、すなわち高電圧電力技術に取り組み、電気・電子分野の横断的共通基礎技術である誘電体材料中の高電界現象の究明研究を行ってきました。優秀な学生、大学の活力・開放性、企業との共同研究など、名古屋大学においてこそできる教育・研究をすることができました。

このような中でここに定年を迎えることができるのも、ひとえに関係の方々のご協力・ご指導の賜物であり、皆様からいただきました永い間のご厚情に心から感謝申し上げます。皆様の今後のますますのご発展をお祈りいたします。



## インハウスの計画担当者としての半生

谷口 元 大学院工学研究科教授

建築学科の助手として教育研究に専念する生活を一段落させ、鶴舞団地の再開発計画を策定するため、平成元年に医学部に講師として派遣されたことが大きな転機でした。それまで鶴舞の再開発計画は外部委託で作成されていたのですが、本省では全く認められないため、学内専門家の派遣という手段を執行部が判断したことによります。

施設部の職員と共に業務を開始しましたが、本省からは建築計画の前に、現状にどのような問題があり、その解決のためにどのような教育研究や運営の改革をするつもりなのかの根拠付けが前提として求められました。その資料作りのために現場を飛び回る日々が続きましたが、「改革」と「根拠に基づく計画」が必要であること、その遂行のためにはユーザーの中に身を置き計画の仕事をする事の重要性を認識し

たこと、何よりユーザーとの協力と信頼関係の構築が必要なることを実体験できたことが貴重でした。

椋山に転職したあと鶴舞の再開発計画が認められ整備が開始されましたが、今年度ようやく完成を見届け感慨ひとしおです。平成7年に出戻りて本学の施設整備担当の教授に任ぜられ、以来多くの関係者の協力を得てキャンパスマスタープランの策定や施設整備への協力など、今日まで活動を続けてきました。上述の根拠付けや計画検証のために、学生らの研究成果が大いに役立ちました。

やり残した仕事を果たすため特任教授としてしばらく残留しますが、それ以降は大学でお世話になった経験を生かし、地域で生きるリアルユーザーの中に身を置いて、私のできることを果たしつつ、暮らしていくつもりであります。



## 大学教育に携わって

平出 正孝 大学院工学研究科教授

還暦を過ぎてもう数年が経とうとしている。それもそのはずである。講師になりたてのつたない講義を受けた学生の皆さんが、今や教授や准教授になっているのである。彼らの活躍する姿をこうして見られることは、教育に携わった1人として無上の喜びである。

工学部の助手に採用されて依頼、36年の永きにわたり、名古屋大学のお世話になった。主たる研究分野は微量成分分析であり、精度・正確さに優れた新しい高感度計測法を確立すべく、分離法や化学的前処理法の開発、分析機器の高性能化に取り組んできた。環境分析や材料分析、ならびに微量計測工学の発展に微力ながら貢献できたのも、恩師、諸先輩、同僚の皆様のお蔭であり、心より御礼申し上げます。

所属する物質制御工学専攻は、平成8年、伝統的学問分野

の垣根を越えた複合領域を教育する目的で新設された。教員同士がお互いを知るため、物制セミナーと称して皆が夕方集まり、工夫を凝らした研究紹介をしながら親睦を深め合った時代が懐かしい。領域専攻と緊密な関係を保ちつつ、複合専攻としての独自性を発揮する必要があり、やり甲斐を覚える一方、理想と現実の大きなかい離も認識した。今後、大学教育に求められる要求は、益々厳しく、多様化すると思われる。名古屋大学独自のカラーを保ちつつ、新しくより魅力的な教育システムの構築が望まれよう。皆様のご活躍と名古屋大学の益々の発展を願い、筆を置く。



## 時の流れとともに変わりゆくものと変わらぬもの

福田 敏男 大学院工学研究科教授

鴨長明の方丈記の有名な一節「行く川の流れば絶えずして……」が好きでいつも研究に当てはめている。時の流れは不可逆であり、それ故に研究テーマの選択は重要で、古いものにしがみつき変わらないと問題を起す。「うたかたのように澱んでいたら」変わらず、潰れる大企業も研究者もかりである。最近の研究バブルの古今東西、過去40年を見ても研究テーマも評価方法も変わってきた。しかしながら、全ての人が適応できるわけではなく、ダーウインの法則に基づき、適応できるものが今も大いに研究を続けてやっていることは変わらない。

古今東西、大学の研究は採用のときは大した Metric もなく、縁故関係なのにもかかわらず、その評価は甘い加減であるし、評価する人を評価するしくみがほとんど無いこと

は変わらない。このように非効率的めま湯と批判されても、これが大学の自由な研究を支える基本であり、日本では特に強く、将来の日本の研究を支えることには変わりはない。早急に結果を出したければ、目的オリエンテッドな研究プロジェクトをすればよいが、日本ではこのグローバルで、学際的なプロジェクト志向の研究は苦手で、良いリーダーが昔から相変わらずあまりいないことは変わらない。

名古屋大学の良いところは、規律・規則は変わらないと言いつつ、実際には時の流れとともに現実に適応し規則・組織すら自在に変えていき、青天井研究を保証し、若老男女を問わず、自由闊達に研究に勤しめるところを変えないことである。この懐深いところは世界広しといえど、名古屋大学ならではであろう。



## 定年退職と青年

水谷 孝 大学院工学研究科教授

民間企業の研究所での研究活動を終えて名古屋大学に着任して18年が過ぎようとしています。18年という長い年月も過ぎてみると早いものです。この間、常に若い学生と接することができ、おかげで、私自身も精神的には若さを保つことができました。着任した当初、卒業式の日が学生が嬉しそうにお礼のあいさつに来てくれるのとは裏腹に、私にとっては落ち込みの日でした。ようやく育った学生がいなくなりまたゼロから育てることの脱力感に馴れていなかったためです。2～3年でこの脱力感に襲われることはなくなり、それ以降は、卒業式当日の学生の嬉しそうな顔が私の元気の源になっていました。

このようなすばらしい環境を去ることは、残念ですが、今回の定年退職を契機に、心機一転、新しい人生をもう1回ス

タートできればと思っています。ある人の言葉によれば、青年とは、夢・希望を持って前に向かって進んでいる人を指すとのこと。「あの人は歳をとった青年だね」と言われるように心がけていきたいと思っています。

長期に亘って支えて下さった関係の皆様、元気をくれた学生諸君、ありがとうございました。



## 「夢の時間」をありがとうございました

美宅 成樹 大学院工学研究科教授

名古屋大学に赴任してちょうど10年になりました。前の大学では生物系の学科だったので、物理の不得意な生物系の学生達と過ごしていましたが、名古屋大学では一転して生物をほとんど勉強していない応用物理の学生達と過ごすことになりました。この環境の変化によって、私の脳の働きがどう変わるかということを楽しみにしていたのですが、結果的に「夢の時間」になりました。生物系から物理系に移ったことに加えて、名古屋大学では単身赴任だったので、脳の中の空間は相当拡大しました。

学生達やポストドクのもたらすデータを脳の空間で転がすうちに、生物のシステムにおける組み合わせ爆発という難問が自然では見事に回避されている様子が玉ねぎの皮をはがすように見えてきました。生物の進化、多様性などの問題の構造

が、配列の物性分布の解析によってきれいに整理されていく研究のプロセスは、わくわくするような時間でした。まさに「夢の時間」を与えていただいた名古屋大学に深く感謝したいと思います。

それを名古屋大学にいた間に世の中に出したいと思い、今年の1月には専門書「ゲノム系計算科学—バイオインフォマティクスを超え、ゲノムの実像に迫るアプローチ」(共立出版)を出し、3月には啓もう書「生物とは何か?—ゲノムが語る生物の進化・多様性・病気」(共立出版)を出版する予定です。





## 未来科学への夢と挑戦

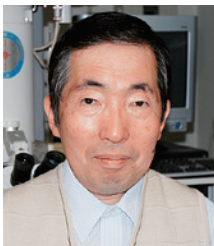
山崎 耕造 大学院工学研究科教授

私は昭和52年3月に東京大学大学院博士課程を修了し、日本学術振興会奨励研究員を経て昭和53年6月に名古屋大学の(旧)プラズマ研究所に着任しました。大学院時代から名古屋大学には共同研究で何度もお世話になりました。名古屋大学プラズマ研究所での自由闊達な雰囲気での研究活動や、2年間の米国プリンストン大学プラズマ物理研究所での多くの友との出会いが、私の研究生活の原点となりました。

名古屋大学プラズマ研究所での核燃焼トカマク計画、その発展としての核融合科学研究所創設の準備室活動、そして、大型ヘリカル装置LHDの物理設計とプラズマ制御研究等、トカマクとヘリカルシステムに関する実験と理論研究に携わることができました。8年前に核融合科学研究所から名古屋大学に戻り、通算では名古屋大学に20年近く勤務したことに

なります。工学研究科エネルギー理工学専攻では幅広い形でエネルギーと物理に関する教育を行うことに努め、プラズマ・核融合研究では、核融合炉システム設計、核燃焼理論シミュレーション解析、基礎プラズマ閉じ込め実験の3つの柱のもとに理論と実験の狭間で教育・研究を進めることができました。後進による未来エネルギー開発の更なる推進に期待しています。

若い学生諸君には、何事においても常に未来に夢を持ち、その夢に向かって挑戦して頂きたいと思います。「未来・夢・挑戦」、これが私から学生に贈りたい言葉です。



## 定年を迎えて思うこと

三宅 博 大学院生命農学研究科教授

1991年に東京農工大学より転任して以来、22年間にわたり本学に勤めさせていただきました。その間おもに電子顕微鏡を用いて、植物に対する環境ストレスの影響などの研究を行いました。

私は、学術憲章の「勇氣ある知識人」という言葉が好きです。このような学術憲章を掲げているということだけで、私は名古屋大学を誇りに思います。しかし勇氣ある知識人を実践することは大変難しいと思います。福島原発事故の直後、マスコミに登場する大学教授、評論家の「原子炉の健全性は保たれています」、「放出された放射能の影響はたいしたことありません」、「プルサーマルと軽水炉に本質的な違いはありません」等々の発言には耳を覆いたくなりました。しかし私が同様の立場に立たされた場合、本当に思うことを発言でき

るか自信はありません。政府や研究費提供者の意向に配慮して、そして何よりも世間の反応を考慮して、当たり障りのない発言になってしまいそうです。小泉政権の頃からでしょうか、マスコミの報道が画一的で意図的になったように思われて不安です。そろそろ大学人は勇氣を振り絞って、恐る恐るでも本当のことを発言しないとこの国は大変なことになりそうです。いやもう大変な状態になってしまったようです。勇氣のない、知識もない私にはここまで書くのが精一杯でした。

皆様、大変お世話になりました。私は名古屋大学に勤めることができたことを光栄に思います。



## いまだ心に残る言葉

柳沼 利信 大学院生命農学研究科教授

昭和44(1969)年、岩手大学に入学し、修士課程まで盛岡で過ごした。その後、名古屋大学大学院農学研究科博士課程に入学した。幸いなことに昭和55(1980)年、助手となり、約33年間教官・教員として勤めることになった。一貫して「カイコの胚休眠の研究」に従事できたことは、ひとえに師・先輩・同輩・後輩・学生諸君のお陰である。名古屋大学の学問に対する自由な有り様にも大いに感謝している。

学科長の時に卒業生に饒の言葉として語り、また、岩手大学北水会報に掲載したこともあったが、依然として心に残っている言葉なので、ここでも伝えたい。

それは、盛岡のとある会社の創立記念事業として、講師に招待された作家が語った言葉である。会場がどのようであったか聴衆者が多くいたのかの記憶は定かでないが、自分の来

し方を話された後で、「私の作品は、大衆文学とか国民文学とか呼ばれ、皆さんに読まれ続け、大変感謝であります。しかし、皆さんの郷土が生んだ宮澤賢治さんの作品は古典文学と呼ばれています。古典とは、時間が経てくれば、そう呼ばれるのかと考えますとそうではない。賢治さんの作品は創られた直後から古典なのです。私の作品との違いは何なのかは、私にも分かりません。この事を問い続けることが重要なことと思っています。」と。

この言葉は、人の生き方や教育・研究にも通じ、大学とはこういう事を問い続ける所ではないかと最近特に感じている。



## 教員の思い、学生の思い

大庭 正春 大学院国際言語文化研究科教授

名古屋大学にドイツ語講師として着任してから、24年もの年月が過ぎてしまいました。この度無事定年退職ができるのも、ひとえに素晴らしい同僚たちや職員の方々、そしてとりわけ優秀な学生たちに恵まれたおかげであり、この場を借りて心から感謝の気持を表したいと思います。

愛知県に生まれ、またこの地で育った私にとりましては名古屋大学の評判は昔から大変良く、いつかそのような大学で仕事ができることは夢にも思いませんでした。

今まで改組によるいくつかの教育組織を経て、1998年4月から国際言語文化研究科の所属となりましたが、大学院では講義を担当し、学部では未修学国語のドイツ語を教えてきました。対象の学生は主に1年生で、理系、文系両方の学生でしたが、ここ約5年前からは同じ学生を週2回担当する機会

を得て、しかも以前と比べ小人数（約30名）のクラスで教えてきました。その際、私が教員として常日頃考えていたのは、教員と学生の思いについてでありました。

よく言われることは、外国語の実践的な運用能力を育てることで、とりわけいかに結果を出すか等の成果主義についてであります。しかし、私にとりましてはそれだけではあまりにも不十分で、両者にとって本当に必要なのは、「心と心の触れ合い」であると思います。1つの目標に向かっての教員の思いと学生の思い、この2つの思いの温かい触れ合いこそが、両者が求めているものに違いないと確信しています。



## 社会環境学の夕べ

溝口 常俊 大学院環境学研究科教授

2001年に文理融合の地球科学、都市工学、それに人文社会の3分野が合体して「環境学研究科」が創設された。文学部の地理学講座に所属してどっぷりと文系の世界に浸っていた者にとっては、まったくの異界に足を踏み入れた感があった。同居していただけの数年間が過ぎた頃、社会環境学専攻の専攻長を拝命して、同じ文系でも隣の先生が、顔は知っているが、どんな研究をされているのか、全く知らないことに気づき、愕然とした。これではいけないと思い、月に1回、専攻会議のあとに、教員、院生が一堂に会して研究紹介をする場をもうけようと企画した。その場を「社会環境学の夕べ」と称して、専攻内の6講座の教室紹介をすることからスタートした。2年目からは、新人でいらした先生に自己紹介していただき、残った枠で古手の先生方にも順次登場

願った。3年目になって院生たちも発表してくれました。

社会環境学専攻の全教員が発表し終え、2まわり目に入ろうかと思った2010年度に小生が研究科の執行部に入って、理工系の先生方と触れ合う機会が多くなった。これを活かさない手はないと思い、目があった理工系の先生方にも声をおかけして発表していただくようにした。身近に何でこんなにすばらしい先生方がいらっしやるのだろうか、毎回発見の連続であった。ヨーロッパの建築、ブータンの氷河、モンゴルの鉱物、そしてはやぶさ2号、南極の氷をなめさせてくださった先生もいた。

異分野が集まる環境学研究科は名古屋大学の縮図である。環境学研究科が発展すれば名古屋大学も発展する。



## 特急列車の40年の旅

横井 茂樹 大学院情報科学研究科教授

私の研究のほとんどは、数年の三重大時代を除いて名古屋大学で行わせて頂きました。研究としては、工学研究科時代と情報文化学部設立時に移らせて頂いて以後と、テーマがかなり異なっております。工学研究科時代は、画像関係の研究を行っており、特に最新のコンピュータ設備を諸先生のご努力で導入でき、最先端のCG研究ができたのは、大変幸運であったと思います。情報文化学部に移ってから、人間情報学研究科、情報科学研究科と組織改組に伴って所属が変化しましたが、基本的に文理融合系の学部に対応して、文系よりの情報科学研究を行ってきました。

通算40年近くになる研究生活ですが、研究テーマを列挙すると、画像処理、コンピュータグラフィックス、バーチャリアリティ、インターネット、ソーシャルメディア、スマー

トフォンという言葉が並んで、流行をおいけてきた感もありますが、この40年間ぐらいで、IT分野ほど進歩が激しい分野もなかったと思っております。振り返ってみると、特急列車（研究テーマ）に乗って、次の駅につくと、景色を楽しむ暇もなく、すぐに次の特急列車が出発しようとしており、それに乗り換えていくといった形で、研究を十分深く追求したりする余裕はあまりなかったと思います。このような研究のスタイルが適切であったか確信はありませんが、新しい分野に学生と一緒にあって、取り組んでこられたのが自分の最大の満足感になっています。





## 名大のスパコンと IT 基盤と共に

荻野 瀧樹 太陽地球環境研究所教授

1971年に大学院工学研究科修士課程に入学して以来42年間名古屋大学にお世話になりました。この間、私の従事した宇宙プラズマの3次元シミュレーション研究はその時代の最大級のコンピュータの利用が必要不可欠でした。その意味でスパコンとIT基盤の進歩と共にあり、その最先端の現場に居合わせる幸運な時間を過ごすことができました。1989年に東大理工学ネット(TISN)の一部としてDECnet(SPAN)とInternetを国内最初のグループとしてB classのIP(133.47.\*)を取得し研究所に導入しました。一方日本の7大学の共同利用大型計算機センターには次々とスパコンが導入されて大学の研究者や学生の利用が促進され、NIIの高速ネットワーク(SINET)も整備されてスパコンとIT基盤は私たちの研究になくてはならないものになりました。

しかし、近年の国家財政の厳しい折、名大などが保持していたスパコンと高速ネットワークは公平の観点からも厳しい目が向けられていて、SINETのノードも来年度は名大から外に出ます。即ち、必要とするならば自前で回線を確保し、社会普及へのリーダーシップをとるように求められています。スパコンについても日本の中での独自色を打ち出しなさい、従来のスパコンの共同利用だけなら9大学必要ですかと。現在、スパコンに関してはHPCIコンソーシアム法人で国の方針についてオープンで議論されています。名大がスパコンと先端的なIT基盤を持続的に維持するためにはビジョンと責任を持つことが大変重要です。名大の持続的発展、そして日本と東海地区でリーダーシップを発揮されることを心から期待します。



## 退任に際して

臼倉 治郎 エコトピア科学研究所教授

昭和63年9月に名古屋大学に着任してから25年が過ぎました。長いようで過ぎてみれば一刹那です。「歲月人を待たず」、「光陰矢のごとし」月並みではありますが、退任に際し実感する言葉です。

最初は医学部でお世話になり、先端技術共同研究センターを経てエコトピア科学研究所で定年を迎えました。私の専門は細胞生物学で、生命現象の「場」としてのアクチン細胞骨格の空間構造を電子顕微鏡により解析しております。エコトピア科学研究所では責任専攻が材料工学であることから、材料工学に即した生命科学を模索し、これまで未経験のナノ粒子の毒性評価の研究に挑戦し、さらにdrug deliveryの研究も開始いたしました。これらの研究は私の本来の研究とは別に推進され、材料工学から配属されている大学院生の努力に

よるところが極めて大であります。7年目にしてようやく、この方面で論文が出て、国際会議からも招待されるようになりました。また、退任直前になり、癌の中性子線治療に資する研究として、ボロン(10B)を効率的かつ選択的にがん細胞内に取り込ませる方法の研究が産総研との共同で始まりました。drug deliveryは世界的には研究者の多い分野ですが、日本の寄与は小さく、今後の発展が望まれます。

退任後はこれまでの研究を纏めることと、生物電顕技術の普及に努めたいと考えております。退任に際し、皆様のご活躍をお祈りします。



## 多面性

北川 邦行 エコトピア科学研究所教授

本学の修士課程を修了後、日立製作所→工学部応用化学科→高温エネルギー変換研究センター→高効率エネルギー変換研究センター→エコトピア科学研究所と放浪してまいりました。それぞれのところで多くの皆様に我儘な私を支えて頂きました。まず、深くお礼を申し上げます。その間、多くの理系、文系の先生方、また、海外の先生方とお付き合い頂く中で、学問の理想は深い探求と、それを広くカバーして全体が見渡せる視点が重要であることを学んできました。

理学的に高い価値があり、かつ、世の中に役に立つ研究を進めるには、深く、かつ多面性を受け入れられる知恵が必要です。私は今までエネルギー科学を展開してまいりました。エネルギー科学では理系はもちろん、心理学や経済学に基づく知恵が必要です。知恵には発想的な要素とそれを論理構成

する要素が同時に必要です。前者に関しては右脳の活性化が必要であります。理系の私にとって、趣味の領域の言語や音楽、さまざまな人との会話が重要な要素として作用してきました。他分野、他国の人の考え方の多面性のスペクトル構造が広いのは言うまでもありませんが、理解することは重要です。

今後は、LED特殊照明の事業化と、インドネシアを基点にアジア地区での教育・研究の推進、趣味では民族・宗教・言語(現在12言語)・音楽(ギター、ピアノ、リコーダー等)・写真などを深めてゆきたいと思っています。



## ただ感謝あるのみ

石浦 正寛 遺伝子実験施設教授

大阪大学、基礎生物学研究所を経て、名古屋大学では理学部生物学科と遺伝子実験施設でそれぞれ助教授、教授として合わせて18年間お世話になりました。若き日に生物化学者にあこがれて大学の理学部に進み、大学院生として主に研究所で育ち、研究者として研究所で研究に専念し、名大にお世話になってからも4年間の学部教員の後に、遺伝子実験施設で博士研究員中心の研究室を持ち、研究専念の幸せな研究者人生を送ることができました。

名大ではライフワークとなった植物細胞の生物時計分子装置の研究を思う存分に進めることができました。当然のことながら、未だ研究のストーリーは完結せず、研究の進展、深化により、遣るべきこと遣れることは益々増える一方です。しかし、存分に働いてきたので思い残すことはありません。

きつと後進の仲間が研究をさらに発展させてくれることでしよう。自由で寛大な研究の場を与え、支えて頂いた名大の皆様は心から感謝致します。自由闊達な進取の精神、おらかな精神が研究大学としての名大をさらに発展させて行くことでしよう。

定年を前にして、教育は何よりもおおらかに人を信じることだと思ふようになりました。教育者としての自覚の乏しい私と付き合ってくれて、私に得がたい経験をさせてくれた、そして私を育ててくれた学部生や卒業研究生、大学院生、博士研究員の皆さんに心より感謝し、前途有為の皆さんの人生の稔りと多幸を祈ります。有難うございました。



## 定年退職を迎えて

松浦 まち子 留学生センター教授

1990年2月、経済学部初代留学生相談室担当留学生専門教育教官として着任して以来、一貫して留学生相談業務に従事してきました。最初の頃に課題だった留学生の保証人制度は撤廃されたり機関保証に形を変えています。また、開発途上国の経済発展につれて留学生の経済事情が変化してきているなど、留学生自身も留学生政策も変容を遂げています。

長い間には日本で帰らぬ人となった留学生を見送ったことや、精神的不安定になって急遽帰国させた留学生もいました。一方、ここ数年力を注いできた留学生の就職支援の結果、立派な社会人に成長した元留学生に再会するという喜びもありました。相談業務においては、「一人一人を大切に」よう心がけてきました。この仕事は「ありがとう」という言葉が返ってくる仕事であり、多様な文化背景を持つ人々

から多くのことを学べる贅沢な仕事です。出会った留学生たちが、将来的に名古屋大学での様々な経験を生かし社会に貢献してくれることを願っています。私が名古屋大学へ来たことになった経緯には不思議なものがありますが、この仕事は私の天職だったかもしれません。

そして無事に定年を迎えることができたのは、偏に関わってくれたださすべての皆様のおかげです。心より深く感謝申し上げますとともに、今後とも名古屋大学が、学生にとって人間性を育み人生の基盤づくりに役立つ教育機関として発展を続けることを期待します。



## あわただしく充実した日々

巽 和行 物質科学国際研究センター教授

早いもので、私も定年を迎える歳になりました。19年に亘る名大での教員生活は、いつも何かに追われているようなあわただしい日々でしたが、大変に充実した日々でもありました。大学院重点化に大学法人化そして評価漬けによる、何か虚ろな忙しさもありました。しかし、変革期あるいは発展期にあった理学研究科および化学科の一員であったことによる昂揚、時には痛々しいばかりの昂揚、に拠る充実した忙しさでした。自身の理学研究は一流であって当たり前、学科を国際的に一流にするのがそこに在籍している教授の務めであり、わが国の化学一延いては世界の化学の将来を見据えるのが化学者としての責務である、という暗黙の圧力を常々感じました。

それでも、名古屋大学理学研究科や物質科学国際研究セン

ターは私にとってたいそう居心地の良い所でした。良い同僚や優れた学生に恵まれたのが1つの理由でしょう。さらに重要だったのは、我々科学者が共通の拠り所とする知の創造を謳う理学精神を共有でき、専門分野は異なっても何かしらお互いに暗黙裡に意図が通じるように思えたことでしよう。そのような優れた教育研究環境を提供し続けてきた名古屋大学理学研究科に籍を置けたことを、ありがたくまた誇りに思っています。

名大在籍の後半では、文科省学術分科会の委員、日本学術会議幹事、国際純正応用化学連合(IUPAC)会長をはじめとした大学外での用務が多く、同僚の皆様には大変な迷惑をおかけしたことと思います。本当にお世話になりました。



本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
1 現代日本誤百科 (739)：さまざまな「人材を織り交ぜる」町田 健文学研究科教授	1.16 (水)	中日 (朝刊)
2 鈴木康弘減災連携研究センター教授は日本活断層学会で航空レーザー測量の画像を「市街地地下に隠れている活断層の位置がはっきり見えた」と発表	1.17 (木)	朝日 (朝刊)
3 現代日本誤百科 (740)：会えないのを「破局原因に挙げる」町田 健文学研究科教授	1.17 (木)	中日 (朝刊)
4 堀 克敏工学研究科教授が微生物をガラス等の表面にくっつける繊維たんぱく質を発見	1.17 (木)	毎日 (朝刊)
5 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ第二部⑧ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.17 (木)	朝日 (朝刊)
6 堀 勝工学研究科教授は薄膜シリコンに堆積する水素原子の密度は成膜装置の壁面が高温なほど低下することを解明	1.18 (金)	日刊工業
7 教育発達科学研究科長に松田武雄同教授を選出	1.18 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
8 森そのかさん医学部学生はセンター試験の体験を基に後輩に助言	1.18 (金)	中日 (朝刊)
9 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ第二部⑨ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.18 (金)	朝日 (朝刊)
10 鍋島俊隆本学名誉教授などは思春期のストレスが後の精神疾患の一因となることを解明	1.18 (金)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
	1.29 (火)	毎日 (朝刊)
11 益川敏英本学特別教授、野依良治同特別教授と大澤文夫同名誉教授が理学部創設70周年記念講演会にて講演	1.19 (土)	中日 (朝刊)
12 訃報：荒木一雄本学名誉教授	1.19 (土)	中日 (朝刊) 読売
13 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ第二部⑩ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生が中京大学教授辻井正次氏本学卒業生に編集者を紹介される	1.19 (土)	朝日 (朝刊)
14 大学入試センター試験：19、20日 本学で実施された試験の様子が紹介される	1.19 (土) 1.20 (日)	日経 (夕刊) 朝日 (朝刊) 他2社
15 本学は大学入試センター試験の再開テストを実施	1.20 (日)	日経 (朝刊) 読売
16 東海経済討論：カーシェアでクルマ離れ進む？ 山本俊行エコトピア科学研究所教授	1.20 (日)	朝日 (朝刊)
17 第9回日本学術振興会賞 山口茂弘物質科学国際研究センター教授	1.20 (日)	読売
18 愛敬浩二法学研究科教授が日本国憲法第99条について述べる	1.20 (日)	中日 (朝刊)
19 第17回静岡県西部地区救急隊員・看護師研究発表会開催：19日 太田圭祐医学部附属病院医員が講演	1.20 (日)	中日 (朝刊)
20 現代日本誤百科 (741)：「世界から狙われる」町田 健文学研究科教授	1.21 (月)	中日 (朝刊)
21 福和伸夫減災連携研究センター教授などのグループはバス停名から地盤を探る調査結果を公開	1.21 (月)	中日 (朝刊)
22 市民公開講座「体の痛みに関する国際シンポジウム」開催：20日 平田 仁医学系研究科教授が出席	1.21 (月)	中日 (朝刊)
23 奥田優奈さん文学部4年生が大学での学びについて述べる	1.21 (月)	朝日 (朝刊)
24 紙つぶて：生きる意味 野依良治本学特別教授	1.21 (月)	中日 (夕刊)
25 現代日本誤百科 (742)：「自分の居場所で災害が起こる」町田 健文学研究科教授	1.22 (火)	中日 (朝刊)
26 ナゴヤカルチャー：知の遺産語り伝えたい 阿部泰郎文学研究科教授	1.22 (火)	朝日 (朝刊)
27 本学と中部電力株式会社は三次元高潮津波シミュレーションを使って津波が及ぼす浜岡原子力発電所への影響を検証する実験を公開	1.22 (火)	読売 朝日 (朝刊)
28 東山哲也理学研究科教授などは異種との受精を起りやすくする植物交雑の鍵分子を発見	1.22 (火)	毎日 (朝刊)
29 パーキンソン病医療講演会開催：27日 平山正昭医学系研究科准教授が講演	1.22 (火)	中日 (朝刊)
30 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ第二部⑪ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生が中京大学教授辻井正次氏本学卒業生に演劇の脚本を依頼される	1.22 (火)	朝日 (朝刊)
31 現代日本誤百科 (743)：「四次元の世界」町田 健文学研究科教授	1.23 (水)	中日 (朝刊)
32 数理ウェブ開催：26日 大沢健夫多元数理科学研究科教授が「科学の原動力」と題して講演	1.23 (水)	中日 (朝刊)
33 市橋克哉法学研究科教授が会長を務める名古屋市職員倫理審査会に河村たかし同市長が再発防止策に関する意見を諮問した	1.23 (水)	読売
34 愛知 (ここ) に人あり：「大好き」といっしょ第二部⑫ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.23 (水)	朝日 (朝刊)
35 第25回博物館企画展「なんじゃ？もんじゃ？ 高木典雄とコケの世界」開催：11月23日～2月2日	1.23 (水)	朝日 (夕刊)
36 後藤百万医学系研究科教授が前立腺肥大症について解説	1.24 (木)	中日 (朝刊)
37 本学は名城大学などと連携し医学系研究科医学博士課程に統合医薬学領域の名称で創薬研究コースを新設	1.24 (木)	中日 (朝刊)
38 現代日本誤百科 (744)：「欠航または欠航が決まっています」町田 健文学研究科教授	1.24 (木)	中日 (朝刊)
39 読売新聞講座「新聞社のメディア戦略」開催：23日 講座に出席したミャンマーからの留学生アウン・ソウ・ミンさんが「ミャンマーではメディアの役割が重要になっている、世界に多数の形態のメディアがあること知った」と語る	1.24 (木)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
40 本学の2013年度大学入試センター試験受験者の自己採点データから予想した河合塾調べによる合格可能性50%のボーダーライン	1.24 (木)	中日 (朝刊)
41 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑬ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.24 (木)	朝日 (朝刊)
42 フィリピンの小児科医を対象にした医学セミナー開催:24日 伊藤嘉規医学部附属病院講師が講演	1.25 (金)	中日 (朝刊)
43 本学が6月に「航空機開発グローバルプロジェクトリーダー養成講座」を開設する	1.25 (金)	日刊工業
44 国際言語文化研究科長に福田真人同教授を選出	1.25 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
45 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑭ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.25 (金)	朝日 (朝刊)
46 情報科学研究科長に坂部俊樹同教授を選出	1.26 (土)	朝日 (朝刊) 日経 (朝刊)
47 医薬品の副作用情報提供に関するシンポジウム開催:2月9、10日 吉田佳督医学系研究科准教授が講演	1.26 (土)	中日 (朝刊)
48 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑮ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.26 (土)	朝日 (朝刊)
49 西谷 望太陽地球環境研究所准教授と小川忠彦本学名誉教授などのグループは大型短波レーダー装置が東日本大震災後の電離圏の振動を観測したと発表	1.27 (日)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
50 海外メディア:オバマ大統領「純化」人事 春名幹男国際言語文化研究科客員教授	1.28 (月)	読売
51 第8回高等研究院レクチャー「近代を問う東アジア」開催:28日 安藤隆穂経済学研究科教授、水田 洋本学名誉教授が講演	1.28 (月)	中日 (朝刊)
52 第68回国民体育大会冬季大会:26日～2月1日 三ツ矢真惟子さん経済学部1年生 フィギュアスケート成年女子ショートプログラム13位	1.28 (月)	中日 (朝刊)
53 三ツ矢真惟子さん経済学部1年生が文武両道を目指して健闘する様子が紹介される	1.28 (月)	中日 (朝刊)
54 未来を拓く大学19:中部大学長山下興亜本学名誉教授	1.28 (月)	読売
55 愛知学長懇話会開催:28日 濱口総長、大村秀章愛知県知事、河村たかし名古屋市長などが出席	1.29 (火)	中日 (朝刊)
56 竹田美和本学名誉教授が3月に瀬戸市に稼動する「中部シンクロトロン光利用施設」について「必要性が高い分析を念頭に設計した」と語る	1.29 (火)	日刊工業
57 第68回国民体育大会冬季大会:26日～2月1日 三ツ矢真惟子さん経済学部1年生 フィギュアスケート成年女子都道府県成績 愛知3位	1.29 (火)	朝日 (朝刊)
58 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑯ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生が中京大学教授辻井正次氏本学卒業生に頼まれ発達障害の子供向けの文章指導教室を開く	1.29 (火)	朝日 (朝刊)
59 祖父江 元医学系研究科教授と勝野雅央同准教授などは熱ショック因子が球脊髄性筋萎縮症の病変分布決定に影響を与えることを突き止めた	1.30 (水)	中日 (朝刊)
60 第67回岐駅伝競走大会:2月3日 出場する陸上競技部の目標などを紹介	1.30 (水)	中日 (朝刊)
61 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑰ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.30 (水)	朝日 (朝刊)
62 濱口総長は「PhD プロフェッショナル登龍門」について「多様な文化を理解し、実社会で活躍できる人材を育てたい」と語る	1.31 (木)	読売 他2社
63 市橋克哉法学研究科教授は本学が「ミャンマー・日本法研究センター」を6月に同国のヤンゴン大学に設立することについて「法律を社会情勢に合わせる事が急務」と語る	1.31 (木)	中日 (朝刊)
64 平成24年度第4回地球教室ー親子対象フィールドセミナー「鉱物をさがそう！」開催:2月23、24日	1.31 (木)	読売
65 第10回キャンパスベンチャーグランプリ中部:特別賞中部経済産業局長賞受賞の確井康祐さん法学部学生など、特別賞名古屋商工会議所会頭賞の杉本慶樹さん医学部学生のプランを紹介	1.31 (木)	日刊工業
66 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑱ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	1.31 (木)	朝日 (朝刊)
67 医学部附属病院は厚生労働省の小児がん治療の地域拠点に選ばれ2月中に正式決定	1.31 (木) 2. 1 (金)	日経 (夕刊) 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
68 谷村省吾情報科学研究科教授、齋藤 晃エコトピア科学研究所准教授、長谷川裕也さん工学研究科大学院生などは公転運動量が異なる二つの電子を重ね合わせると干渉することを突き止めた	2. 1 (金) 2. 8 (金)	日刊工業 中日 (朝刊)
69 本学はベトナム医師育成支援のため医学部附属病院診療科消化器内科の内視鏡医師などを同国に派遣	2. 1 (金)	読売
70 第4回尾張名古屋の行く末を考える会:1月31日 株式会社共立総合研究所取締役副社長江口 忍氏本学卒業生が講演	2. 1 (金)	朝日 (朝刊)
71 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑲ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	2. 1 (金)	朝日 (朝刊)
72 本学の2次試験中間出願状況は前期の出願者が1259人で倍率は0.7倍と例年並みの出足	2. 2 (土)	読売 毎日 (朝刊)
73 愛知 (ここ) に人あり:「大好き」といっしょ第二部⑳ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	2. 2 (土)	朝日 (朝刊)
74 病院の実力:脳卒中 宮地 茂医学系研究科准教授がコイル塞栓術について解説	2. 3 (日)	読売



本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
75 福和伸夫減災連携研究センター教授は3月に発足する「東海圏減災研究コンソーシアム」について「東京大学地震研究所や京都大学防災研究所にも負けない実力を持った連合体にしていきたい」と語る	2. 4 (月) 2.10 (日)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
76 第67回名岐駅伝競走大会：3日 陸上競技部 一般の部19位	2. 4 (月)	中日 (朝刊)
77 第67回名岐駅伝競走大会：3日 波多野 晶さん文学部4年生が大学最後のレースに記録の残るAチームで出場できた喜びを語る	2. 4 (月)	中日 (朝刊)
78 第5回日経テクノネサンスジャパン 株式会社デンソー賞優良賞 岩本友太さん情報科学研究科大学院生	2. 4 (月)	日経 (朝刊)
79 未来を拓く大学20：金城学院大学長奥村隆平本学名誉教授	2. 4 (月)	読売
80 そこが聞きたい：前駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生	2. 4 (月)	毎日 (朝刊)
81 紙つぶて：科学と技術 野依良治本学特別教授	2. 4 (月)	中日 (夕刊)
82 塩川和夫太陽地球環境研究所教授などは北海道で観測された低緯度オーロラの発生の仕組みを解明	2. 5 (火)	中日 (朝刊)
83 尾崎紀夫医学系研究科教授が新技術開発財団の東日本大震災復興支援特定研究助成2012の助成先に選出される	2. 5 (火)	日刊工業
84 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知① 平和・知る喜び 伝え続け 益川敏英本学特別教授、小林 誠同特別教授	2. 5 (火)	朝日 (朝刊)
85 中部経済活性化シンポジウム Vol.4開催：3月4日 林 良嗣環境学研究科教授が講演	2. 5 (火)	日経 (朝刊)
86 大場裕一生命農学研究科助教はホタルのさなぎの頭が光り続ける構造を解明	2. 6 (水)	中日 (朝刊)
87 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知② 大空襲下で生きた5歳 益川敏英本学特別教授	2. 6 (水)	朝日 (朝刊)
88 中京って？第2部⑤：「うまみ強い」豆みそ 南山大学教授安田文吉氏本学卒業生	2. 6 (水)	読売
89 医学部附属病院院長に石黒直樹医学系研究科教授を選出	2. 7 (木)	中日 (朝刊) 他2社
90 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知③ 父との夜道 好奇心育つ 益川敏英本学特別教授	2. 7 (木)	朝日 (朝刊)
91 高野雅夫環境学研究科准教授が内部被ばくについて学ぶイベントで放射線量測定などの活動報告を行う	2. 7 (木)	中日 (朝刊)
92 体験講座「初めての博物画 ボタニカルアート」開催：20日、27日	2. 7 (木)	読売
93 東日本大震災から2年 これからの防災を考えるシンポジウム開催：3月11日 武村雅之減災連携研究センター寄附研究部門教授、廣井 悠同准教授が講演	2. 7 (木)	日経 (朝刊)
94 脳科学のフロンティア上：下村 脩本学特別教授が発見した緑色蛍光タンパク質が紹介される	2. 7 (木)	中日 (朝刊)
95 国立大学最終出願状況：本学の志願者数などが紹介される	2. 7 (木)	読売
96 大平英樹環境学研究科教授がギャンブルの魅力について解説	2. 7 (木)	朝日 (夕刊)
97 医学部附属病院の乳がん治療の実績が紹介される	2. 7 (木)	日経 (夕刊)
98 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知④ 小5で知った本の魅力 益川敏英本学特別教授	2. 8 (金)	朝日 (朝刊)
99 2013年度に打ち上げが予定されている本学と大同大学などが共同で開発した人工衛星が紹介される	2. 8 (金)	朝日 (朝刊)
100 名大カフェ "Science, and Me" 第30回「幻の中将棋を指してみませんか」開催：13日 武田 稔産学官連携推進室教授が歴史や面白さについて語る	2. 8 (金)	読売
101 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑤ 「小説小僧」星に感動 益川敏英本学特別教授	2. 9 (土)	朝日 (朝刊)
102 平成24年度中谷宇吉郎科学奨励賞 津滝 俊環境学研究科研究員	2. 9 (土)	中日 (朝刊)
103 小林 誠本学特別教授が著者に名を連ねる科学をテーマにした新書「ブルーボックス」が創刊50年を迎える	2. 9 (土)	中日 (夕刊)
104 中日新聞フォーラム「大震災と防災を考える」：9日 福和伸夫減災連携研究センター教授が減災の立場から提言	2.10 (日)	中日 (朝刊)
105 現代日本誤百科 (752)：「衣がエビにまとわる」町田 健文学研究科教授	2.11 (月)	中日 (朝刊)
106 米澤彰純国際開発研究科准教授が国際大学ランキングについて解説	2.11 (月)	日経 (朝刊)
107 核心：前駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生	2.11 (月)	中日 (朝刊)
108 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑥ 「名古屋発の科学」胸躍る 益川敏英本学特別教授	2.13 (水)	朝日 (朝刊)
109 現代日本誤百科 (753)：「うたかたの季節」を楽しむ 町田 健文学研究科教授	2.13 (水)	中日 (朝刊)
110 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：11日 益川敏英本学特別教授が講演と討論を行う	2.13 (水)	読売
111 第26回博物館企画展「ボタニカルアートと明治の博物画」：9日～3月9日	2.13 (水)	朝日 (夕刊)
112 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑦ 「砂糖屋・嫌だ」猛勉強 益川敏英本学特別教授	2.14 (木)	朝日 (朝刊)
113 現代日本誤百科 (754)：「運命のドラフト会議」町田 健文学研究科教授	2.14 (木)	中日 (朝刊)
114 愛知 (ここ) に人あり：φιλοσοφία 愛される知⑧ 議論、議論、何でも議論 益川敏英本学特別教授	2.15 (金)	朝日 (朝刊)

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**2月5日(火)～5月10日(金)**

場 所：附属図書館医学部分館  
2階入口ホール

時 間：9:00～20:00(平日)  
(3/21～29は9:00～17:00)  
13:00～17:00(土曜日)

休 館 日：日・祝日、3/23、30

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

附属図書館医学部分館第3回ミニ展示会

「不思議!? 解剖図

ーヴェサリウスから奈良坂源一郎までー」



**3月20日(水)**

場 所：理学南館1階  
坂田・平田ホール、他

時 間：15:00～17:00

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

リサーチアドミニストレーション室

研究員 戸次真一郎 052-747-6791

名古屋大学オープンレクチャー2013

内 容：少人数の講義スタイルで、大学や研究者、最先端研究が身近に感じられるよう研究をわかりやすく紹介



**3月23日(土)**

場 所：西尾市岩瀬文庫地階研修ホール  
(西尾市亀沢町)

時 間：13:30～16:30

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

国際言語文化研究科

助教 伊藤信博 052-789-5282

平成24年度国際言語文化研究科 教育研究プロジェクト

テ ー マ：「文化創造の発展とその展開

ー食・戦い・装い、室町から江戸ー」

講演題目：「室町および江戸における食物生産と絵物語」

講 演 者：伊藤信博(国際言語文化研究科助教)

講演題目：「嗜好品や食物の対立を描く物語について」

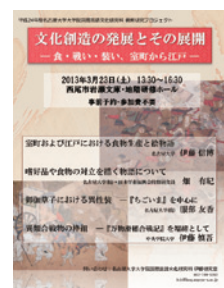
講 演 者：畑 有紀(国際言語文化研究科大学院生)

講演題目：「御伽草子における異性装ー『ちごいま』を中心に」

講 演 者：服部友香(文学研究科大学院生)

講演題目：「異類合戦物の枠組ー『万物滑稽合戦記』を端緒として」

講 演 者：伊藤慎吾氏(中央学院大学非常勤講師)



**3月25日(月)～7月20日(土)**

場 所：博物館展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

(3月25日(月)、6月9日(日))

臨時開館)

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第17回博物館特別展「くじら・クジラ・鯨」

内 容：2009年に名古屋港に漂着したマッコウクジラの骨格標本と制作過程の写真や映像、江戸時代の捕鯨で使われた道具の展示

[関連講演会]

**4月23日(火)**

場 所：博物館講義室

時 間：14:00～15:30

講演題目：「クジラー知られざる鯨類の世界ー」

講 演 者：中江 環氏(太地町立くじらの博物館学芸員)

対 象：一般

参 加 費：無料



**4月18日(木)、19日(金)**

場 所：野依記念学術交流館

時 間：10:00～19:00

[問い合わせ先]

トランスフォーマティブ

生命分子研究所事務室 052-747-6840

トランスフォーマティブ生命分子研究所

キックオフシンポジウム



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

## 4月19日(金)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール  
 時 間：14:00～17:00  
 対 象：関係研究者  
 参 加 費：無料

## 平成24年度活動報告会

### 減災連携研究センター エネルギー防災寄附研究部門

講 演 者：武村雅之（減災連携研究センター寄附研究部門教授）、  
 都築充雄（同寄附研究部門准教授）、  
 虎谷健司（同寄附研究部門助教）

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

## 4月20日(土)

場 所：博物館実験室、展示室、  
 東山キャンパス構内  
 時 間：12:50～16:00  
 定 員：各回20名  
 対 象：小学5年生以上、一般  
 参 加 費：50円（保険料）

## ミクロの探検隊<sup>®</sup>

テ ー マ：「ホニュウ類の組織を電子顕微鏡で見よう」

内 容：生物顕微鏡、走査型電子顕微鏡を使用し、すい臓や気管などの  
 組織を観察し形と働きを学ぶ



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

## 4月24日(水)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール  
 時 間：18:00～19:30  
 定 員：120名  
 対 象：一般  
 参 加 費：無料

## 第89回防災アカデミー

講 演 者：松本真理子（発達心理精神科学教育研究センター教授）

内 容：臨床心理学関連

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

## 4月27日(土)

場 所：博物館展示室  
 時 間：14:00～15:00  
 参 加 費：無料

## 博物館コンサート

テ ー マ：「爽やかな風にのせて～ミュージックベルの調べ～」

出 演：Sonnette（ソネット）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



227号（2012年4月）  
ES 総合館で物理学談義に興じる学生



228号（2012年5月）  
根本二郎経済学研究科教授による講義の様子



229号（2012年6月）  
田中利治生命農学研究所教授による基礎  
セミナーで野菜の成長を確認する学生



230号（2012年7月）  
講義を受ける国際プログラム群  
物理数理工学プログラムの学生



231号（2012年8月）  
教育学部中庭で語らいながら学ぶ  
教育発達科学研究科の学生



232号（2012年9月）  
法学部水島ゼミにおける  
国際法模擬裁判の様子





233号 (2012年10月)  
工学部環境土木・建築学科における  
建築設計演習の講評会の様子



234号 (2012年11月)  
東山キャンパスグリーンベルトで談笑する  
文学部の学生



235号 (2012年12月)  
松原 緑教養教育院准教授による英語の授業  
で CALL 教室にてリスニングを行う学生



236号 (2013年1月)  
山篠貴史生命農学研究科助教による  
細胞生物学実験の授業の様子



237号 (2013年2月)  
松下 正医学部附属病院教授による  
採血実習の様子



238号 (2013年3月)  
附属図書館で学習する学生

名大トピックス No.238 平成25年3月15日発行  
編集・発行/名古屋大学広報室  
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。  
名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)  
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

附属図書館で学習する学生  
(平成25年2月5日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

## 131 天王崎から鶴舞へ — 鶴舞キャンパスの誕生 —

大学院医学系研究科・医学部や医学部附属病院がある名大鶴舞キャンパスの歴史は、医学部の前身である愛知県立医学専門学校（愛知医専）がここに移転した1914(大正3)3月までさかのぼることができます。

鶴舞に移転する前の愛知医専は、名古屋市内の天王崎にありました。現在でいえば中区栄1丁目、堀川東岸の株式会社トーエネック本社のあたりです。1877(明治10)7月に、西本願寺掛所（現在、中区門前町1丁目、西本願寺別院）から移転しました。敷地面積約2万㎡、新築の専門施設でした（当時は愛知県公立病院・公立医学所）。

やがて、学校・病院の発展とともに、施設がしだいに老朽化・狭隘化していきましたが、寄付金による小規模な増改築や隣接地の取得などでは追いつかず、抜本的な解決にはもっと広い敷地への移転が不可欠でした。しかし、財政的な問題からなかなか実現に至りませんでした。

そうしたなか、明治の末頃から、愛知医専の官立移管、

官立大学への昇格を望む声が高まりました。それにも施設の拡充が必要でしたが、官立になれば県の財政負担も軽くなるだけに、議会の賛成も得やすくなります。こうして、鶴舞公園の隣接地への移転が実現することになりました。莫大な移転費用は、愛知医専の基金の取り崩し金と、県からの借入金によってまかなわれました。

移転先の名古屋市中区鶴舞町（現在は昭和区）は、商工業化にともない市域の拡大をはかる名古屋市が、1909(明治42)年に愛知郡御器所村の一部を合併したばかりの地域でした。同年には鶴舞公園が開園し、その翌年には名古屋開府300年記念事業として、ここで第10回関西府県連合共進会が盛大に開催されました。鶴舞は、まさに名古屋市の外への発展を象徴する地であったのです。

天王崎時代の約3倍の広さの新天地を得て、以後県立医科大学から官立医科大学、そして帝国大学医学部へと発展する環境が整えられていったのでした。



2	3	4
1	5	

- 1 第十回関西府県連合共進会全図 (1910年、名古屋市市政資料館所蔵)。内容的には産業博覧会であったが、3カ月の会期に260万人もの来場者があった。
- 2 鶴舞に新築中の愛知医専校舎。
- 3 鶴舞公園の亀ヶ池から見た移転当時の愛知医専。
- 4 移転当時の医化学実験室。鶴舞への移転にともない、実験室・実習室が大幅に拡充された。
- 5 新築開校記念式 (1915年11月) で愛知医専正門に架けられた緑門。1,200余名を集めた式典のほか、提灯行列や大運動会、学校・病院の一般公開などがおこなわれた。